
最後の鴉は何を思って飛ぶ...

いつでもどこでも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の鴉は何を思っ て飛ぶ…

【Nコード】

N7323X

【作者名】

いつでもどこでも

【あらすじ】

とある世界。

その世界である男が死んだ。

秩序を重んじる企業のためではなく、

また自由を勝ち取る組織のためでもない。

お互いに笑い合える世界のために死んだ。

自らの羽にその罪を全て乗せて… …

だが、鴉は落ちる事なく再び空を舞う。

その時、鴉は何を思うのか…
…
…

注意！！

作者はラストレイブンの話しは殆んど知りません。人づてに聞いた事があるくらいの知識しかありません。

ISにいたっては原作すら読んでません。

「設定と違うのヤダ」とか「原作遵守」っていう方にはオススメしません。

それが大丈夫な方はどうぞ。

PS：特にACファンの方々にはオススメしません。寧ろ見ない方がいいです。

ブログ 最後の鴉（前書き）

やってしまった… …

ISの作品を見てたら… …書いてしまった… …

ちなみにラストレイブンの世界観は色々とメチャクチャです。

ISの世界観もまた然りです。

それでも良いのなら見てやってくださいな。

プロローグ 最後の鴉

——とある世界。

その世界である1人の男がいた。

男はその世界で最強を誇る兵器、ACを駆り、傭兵として、レイヴンとして生きてきた…

——男は戦い続けた。

その類い稀なる才能と一切の妥協を許さぬ鍛練によって 最強の傭兵 となり、敵には恐怖を、味方には畏怖をされながら…

——皆は男を嫌悪し、侮蔑し、罵った。

人は男を『金の亡者』と、『金で人を殺す人でなし』と言って男を批難した。

その中傷を彼は否定せず、また肯定もせず、男はただただ戦い続けた…

——男には守りたいものがあつた。

男は別に金が欲しかった訳じゃない。

不当な暴力による愛する者への生命の危機。圧倒的弱者への一方的な暴力的危害。

それを見過ごす事はできない優しい心の持ち主だった。

だから男は守るために戦った。

皆んなから、助けた相手からも『人殺し！』と、言われながらも…

——男は一人になった。

男は皆んなを守るために皆んなと戦い続け、いつしか男は一人になった。

己が権益と権力を守るために他を犠牲にする「アライアンス」と敵対し、それを打倒するために他を犠牲にする「バーテックス」とも敵対した。

2人いたレイヴンは自分一人となり、味方は誰もいなくなった。そして男はみんなを守ったその功績を 狂気の所業 と貶められ、人々から断罪されようとしていた… ……

「よつこらせ、イテテテ… ……」

誰もいない、ビルも何もかもが倒壊している灰色の廃墟の街の中で、俺は丁度人が1人よりかかれる瓦礫に座り込んだ。

だけどその時に脇腹の傷が開いちまった。

少し血が滲み出てきやがったぜ… ……

「ふう… ……これが最後のレーションか… ……」

だがこの程度の傷でどうにかなる俺じゃねーんだなコレが。

俺は懷に手をのばしてレー^{保存食}ションを取り出して頬張る。

「くうゝゝゝ… ……まつつつず!!」

相変わらず吐き気を催す程の不味さだ。

最期のメシだから精神的作用で少しはマシになるかと思ったが、寧

る最期のメシがこんなゲキ不味いものだと思うと余計にツライ。
ダメージ2割増しだな。いらねえ・・・

「やば、さっきの声で傷がかなり開いちゃった」

さっきの「まっつつず!!」で傷が開いちゃったぜ。
血がどくどくと流れてきやがった・・・

「まあ…今更そんな事気にしても仕方ねーか…」

脇腹の傷以外にも俺の体にはあちこちに傷がある。

それこそ、致命傷一步手前のものなんてザラにある。

それにもう俺は長くねえ。

見た目もそうだが中の方も相当グチャグチャになっている。

よく今まで生きてきたな俺。すこし感心。

「……………」

改めて自分が死ぬ事を思うと心が静かになる。

「アライアンス」と正面きってぶち当たったし、「バーテックス」
のジャック・Oとも正々堂々と殺りあった。

それも全て子供たちや次の世代を担う者たちのために。

結果、俺は皆んなに追われてこんなザマになっているが後悔はねえ。

別にヒーローになりたくてやった訳じゃねーし、傭兵なんて仕事選んだ時点で皆んなに恨まれるのは分かっていたことだ。

【狂気の夜】なんて通り名も付けられちゃったしな。

「そついえばお前にも色々と苦労かけたな。 【夜】： ……」

俺は目の前で俺と同じようにビルでよりかかっている真っ黒い機械に語りかける。

【夜】は俺の使うＡＣの名前だ。

俺がレイヴンとして働いた時からの仲であり、色々な苦難も一緒に乗り越えてきた相棒だ。

だが、無理に無茶を重ねてきた結果、ボディは所々穴ぼこが空き、右腕は配線コードが繋がっているだけの状態。

左腕も何とか形を保っているだけ、という、みるも無惨な状態。

「思えば色んな無茶をお前にさせてきたな．．
済まねえな。こんなだらしない相棒でよ………」

『……………』

俺は相棒に語りかけるが、勿論答える訳がない。

それでも俺は相棒が『気にするな』と言ってくれたように思えてならない。

自己満足だと思っなら言ってくれ。別に否定はしねーぜ。

「ん？とうとう来たか……」

空気中から伝わって俺の鼓膜が震える。

地面に座っている所から僅かな地響きがする。

どうやら軍用ヘリと戦車が来たみたいだな。

この感じからすると、それぞれ30機はいるな……

普段なら取るに足りない相手だが、他の人たちを省みない「ろくでなし」は俺が全部ぶっ潰した。

今の軍部はしっかりとした良識を持った人たちしかない。

だから俺は抵抗しない。というかできない。

足の骨はキレイに折れて肋骨は半分以上が折れている。

腕の骨も折れているし、これじゃ逃げることもできない。

「それに……すこし、眠い……」

さつきから異様に睡魔が襲ってくる。

勿論これで寝てしまったら二度と目覚めない眠りなのは分かっている。

だが眠い。もうこれ以上目蓋を開ける事ができない。

「もう……限界だ……。ここが、俺の最期か……」

だが……悪くはない……。ああ……本当に悪くない、最……」

……だ……」

後悔なんてしてない。

あるとすれば救えなかった命があったこと。

俺の…、この【狂気の夜】の命を以ってしてこの世界は平和になる。
子供達が笑いあう、優しい世界へとなる。

これで…これで良いんだ…。

俺は睡魔に抗う事なく、ゆっくりと、そして静かに、二度と目覚める
ことのない眠りへ落ちていった…。

スッロン・レイヴン
こうして 最強の傭兵 であり、 ラスト・レイヴン
最後の傭兵 である彼は深い眠
りについた。

その顔はとても晴れやかで、とても満足していた表情だった。

——だが、後に彼を追ってきた軍は彼の死体も、彼の機体も発見
出来なかったと上層部に報告した。

ブログ 最後の鴉（後書き）

いかがでしたか？

私は原作を読んでいないのでISの世界観も結構好い加減です。

あるとすれば他の作家さんが書いたものでなんとか理解しています。
応援よろしくお願いします。

新しい生

「ん~~~~!!… ……もう朝か… ……」

眩しい朝日が俺の顔めがけて差し込む中、俺は気だるい雰囲気を出しながらも目を覚ました。ボサボサの髪は適当に手ぐしで整え、体をグツと伸ばして体の中にある眠気を追い出す。

(… ……そろそろ髪切るか… ……)

結構長くなってきた髪の毛を掴んで、そんな事を考えながら俺は一階に降りた。

~~~~~

「おはよう… ……」

一階に降りて、リビングまできた俺は朝の挨拶を言う。だが、その挨拶を返してくれる人は誰もいない。まあ、そんな事は分かっているから俺は気にしない。

俺はそのまま台所に向かい、炊飯器の保温機能を切り、冷蔵庫から

卵を取り出して卵焼きを作る準備をする。

その間に残ってある味噌汁を火にかけて、ご飯をよそう。

あとは卵焼きを作って、温めた味噌汁もよそってはい出来上がり。  
俺の朝メシはあつという間に完成。

その後リビングに戻って俺は朝メシを食べた。  
勿論ちゃんと「いただきます」と挨拶したぜ。

誰も返してこないがな…

「… うん、今日も上々の出来だ」

俺は自分の作った料理に自分で評価しながらメシを食った。

お、今日の卵焼きは一段と美味いな。

あいつらにも食わしてやるか…

~~~~~

朝メシが終わったあと、俺は洗面台に立って身なりの確認をする。
と言っても寝癖を直すだけなんだけどな。

「……………」

寝癖を直し終わったあと、俺は自分の顔を見る。
日本人特有の黒い髪。キリッとした目付き。

幼なさはまだまだ残っているが、その顔は前世の俺の顔と同じだった。

そつ、みんなはとくに分かっていたと思うが、俺はあの時に死んだはずの男だ。

前世の名前は思い出せねーが、今は真鴉まがらす 黒羽くろはつつ名前なまえで生きている。

なんでこんな形で生まれ変わってるのか俺にも全く分からねえんだわ、コレが。

あの時強烈な眠気に誘われて眠っちまったんだが、気が付いた時には子供になっていたんだよ。

あ、ちなみに両親はいねえ。

なんでも俺は捨て子だよ。

まあ悲しくはなかったし、俺には知ったこっちゃねえからな。

伊達に前世じゃ三十路ギリギリなんだからな。

で、俺は神社の前に捨てられてたらしく、神主さんが俺を引き取ってくれたんだ。

最初是一緒の家に住んでいたんだが、そこはアレだ。所謂“多感なお年頃”ってやつで別宅で1人ですんでいる。

ん？さつき三十路ギリギリって言ってたのに多感なお年頃は可笑しいんじゃないかって？

分かってないなあ。前世は前世。今世は今世だ。

詭弁だつて？何とでも言え。

まあ、俺の事についてはそんな所だ。
にしてもこの世界はスゲえぜ。

前世の俺がいた世界とは全く違う。

賑わう人々。生い茂る草木。当たり前のように飲める水。

そのどれもが俺のいた世界とは真逆。

いい世界だ…俺が命を捨てても成したかった世界がここにはある。
俺のいた世界も長い長い時間をかければこんな世界になんのかな…

…

「………つていけねえ！」

もうこんな時間が、早くしねえと遅れちまう！」

ふう、ついつい考え込みしまったぜ。

今日は道場に行かなきゃいけないんだ。

俺の幼馴染達が剣道やっててよ。それに俺も付き合ってるんだわ。

レイヴンだった頃の俺はブレード主力の戦法だったからな。

ブレードでACを破壊するのは勿論、爆撃機を斬ったりもした、

それに比例して俺自身の剣の腕も相当なもんになった。

ちなみに俺も射撃はできるがあまり好きじゃないから滅多な事では使わなかった。

「さてと、準備は出来たし、さつさと向かいますか」

時間はまだ全然ある。これなら歩いて行っても大丈夫だ。

幸い、この家と道場は歩いて十分もかからない程の距離なんだ。

俺は荷物を持ち、鍵をかけて、道場に向かった。

「——つと、卵焼き………」

まずいまずい。卵焼きを忘れてしまった。

~~~~~

「よお、待ったか？」

時間には間に合ったんだが既に2人は来ていた。  
俺は2人に声をかける。

「あ、黒兄。全然待ってないよ」

「今日もよろしくお願いします！師匠！」

答えたのは1人の男の子と女の子。

男の子は気楽な感じで手を振り。

もう1人の女の子はガバツと頭を下げる。

手を振る男の子の名前は織斑 一夏。

俺と同じ捨て子で姉弟2人で暮らしている

頭を下げる女の子の名前は篠ノ之 箒。

俺を拾ってくれた神主さんの娘さんの1人。

こつちにも姉が1人いる。  
ちなみに箒は一夏に惚れてるんだぜ。  
いいねえ、青春だねえ。

「一夏。俺を黒兄と呼ぶな。俺とお前は同い年じゃねーか。  
それに箒。お前も俺を師匠と呼ぶな。  
むず痒くてかなわねー」

だがこの2人は俺の事を黒兄と師匠と呼ぶ。  
まあ前世の記憶持つてるから他の奴らより大人びているのは認める  
が同い年である以上あまり呼んでほしくない。  
箒の方も以前俺が剣道を教えた時に目を輝かせて「師匠!」と呼ぶ  
ようになった。

俺は師匠なんてガラじゃねーからムズ痒いんだ。

「うん、わかった黒兄」

「で、でも師匠に教えてもらってから格段に強くなりましたし…。  
だから師匠は師匠なんです」

一夏、あとで殴る。

それと箒。俺の剣は人を殺す剣であってお前達のような剣ではない。  
だから俺を師匠と仰がないでくれ。

「ふう…分かった。今日のところは一先ず許す。」

だが、これ以降はあまり呼ぶなよ」

まあ、いつか時間が解決してくれるか。

2人も成長したら俺を黒兄や師匠と呼ばなくなるだろう。

「さて、んじゃ早速やりますか。

はいはい2人とも所定の位置に着いて」

手をパンパンと叩きながら、俺は2人を道場の中央に誘う。

2人を打ち合わせ、それを見た俺が改善点を2人に教える。

これが俺の指導の仕方だ。

俺の剣は邪道だからな。そんなもんを教えたら2人の剣の型が崩れちまう。

それだと本末転倒だろ？

「よし、それじゃあ2人とも… …始め!!」

「「ツツ!!」」

俺の声を合図に2人は飛び出した。

それからはお互いに竹刀の小気味いい音を響かせながら存分に打ち合った。

うんうん。2人の年を考えれば相当に上手いな。まあ、年を考えれば、だけどね。

~~~~~

「2人ともそこまで!!」

それから約一時間程、俺の合図によって2人の剣戟は終わった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「ふう……ふう……ふう……ふう……」

終わるや否や、2人は床に座り込んで肩で息をする。
全くこの程度で情けない。2人とも鍛錬が足りないな。

「休んでる暇はないぞ。」

早速2人に改善点を教えるからすぐに立つんだ」

「お……鬼……」

「師匠……き、厳しいです……」

「何を言っただ。2人とも鍛錬が足りないからそんなザマになるんだ。」

それに無駄な動きも多すぎる。
それを教えるから早く立て」

渋る2人を俺は無理矢理立たせる。
本当に鬼だつて？なんとも言え。

2人は俺には「強くなりたい！」って言ったんだぜ？
こんなんで音を上げるような生半可な覚悟はドブにでも捨てちまいな。

2人が強くなりたいなら俺は鬼にでも悪魔にでもなるぜ。

「まずは一夏からだな。

体捌きや足捌きはこの前より良くなっている。
そのまま技術の向上を目指すように」

「はい！」

「だが、お前は剣の部分だけを見過ぎだ。

剣ばかり見てて簞の攻撃に対応できてない所が多々あった。
最初の頃は難しいが、もっと全体を見るように心掛ける。
そうすれば剣だろうが銃弾だろうが余裕で避けられる」

「じゅ、銃弾はさすがに無理… ……」

何を言うか。

鉛弾やエネルギー弾。はてはグレネードランチャーまで飛んでくる
弾雨の嵐が押し寄せる… ……

俺はそんな世界で生き残ってきたんだぞ。

銃なんて指の動きを見れば普通に避けられるぞ。
無理なら死ぬだけだな。

「次に筭。」

一夏程ではないが、体捌きや足捌きは良くなってきた。
それに、段々とだが全体を見る事に慣れだしている。

このまま相手全体を見る事が出来るように目指すんだ」

「ありがとうございます！師匠！」

「だが力みすぎだ。」

男の一夏に張り合おうとする気持ちは分かるが、力みすぎで逆に威力がない。

力を入れるのは相手を斬る時のほんの一瞬でいい。

それ以外は力を抜け。力を抜けば抜く程、剣の一撃は鋭くなり重くなる。

その気になれば鉄塊をも斬る事が出来るぞ」

「し、師匠……鉄塊はいくらなんでも………」

そうかな？

さすがに竹刀では無理だが、本物の刀なら斬れるぜ？

竹刀だと木板が限界だな。

「ま、鍛錬を続ければその内分かるさ。」

よし、俺が少し手本を見せちゃる」

そう言つて俺は竹刀袋から竹刀を取り出す。

だが竹刀の長さは2人の持つ竹刀より遥かに長く、全体の長さは150cm程で今の俺の身長と同じくらいの長さを誇っている。

「わあ！黒兄が竹刀をとった！」

「久しぶりに見ます！」

それだけなのに2人は目を輝かせている。

そう言えば2人には俺が竹刀を持っている姿はあまり見せていなかったな。

「ほらほら、2人とも危ないから離れている。当たっても知らんぞ」

2人を道場の壁際の座らせて俺は精神を集中させる。

深く息を吸って、吐いて、一回…二回……三回……。

身体中に酸素が行き渡り筋肉の緊張がほぐれる。

自分の筋肉が液体のようにドロドロになる錯覚を覚える。

よしよし。いい感じだ。

これでツツ

「せいっ!!!」

光芒一閃

ドロドロになった俺の筋肉は光を超える速さで一本一本の筋に戻り、俺の足は爆弾が爆ぜたように一瞬で踏み込む。頭から振り下ろす竹刀は鋭い風切り音と共に床に着く。そしてその後に残ったのは一切の音が存在すること許さぬ静寂だった。

「す… …… すごい… ……」

「… …… (こくこく)」

唯一この静寂の世界で声を発する一夏は俺の動きを見て感嘆の声を漏らし、

箒にいたっては声も発する事ができず、首をこくこくと縦に振って一夏の言葉を肯定する。

その姿を見て思わずカワイイと思ってしまった。

いまロリコンだと思ったやつ、

自宅にコジマ粒子を送りつけてやる…。

もちろん着払いだ。安心しろ。

「とまあ、こんな感じだ。何か質問はあるか？」

「すごいよ黒兄！ロじゃあ上手く説明できないけど、とにかくすごいえ！…！」

「一瞬、師匠の動きが見えなくなりました… ……」

一夏は直感的に俺の技術の本質を見抜いたらしいな。

箒は一部分だけだが俺の動きが見えたのか。

2人とも剣の才能なら俺と同等、若しくはそれ以上だな。

未恐ろしい2人だぜ……。

だが、まだまだ負けるつもりはねえがな。

「まあ、しっかりと鍛錬すればこれくら——ッ!？」

——殺気っ!!

「——ふんっ!!」

「シッ!!」

突如俺の頭目掛けて振るわれた竹刀を俺は横薙ぎに払って弾く。

「ちっ…惜しかったな…」

襲撃者はすぐさま後ろに飛び退いて俺の剣の射程から離脱する。
舌打ちしながら俺を睨む襲撃者の正体は…

「はあ…また貴女ですか…千冬さん」

長い黒髪をなびかせ、10人中10人が美人と言っだろう美しい顔立ち。

一夏のただ1人の肉親にして姉の織斑 千冬さん。

ちなみに精神年齢では俺の方が圧倒的に上だが、肉体年齢では千冬さんの方が上なので“さん”を付けている。
今では敬語も普通に使えるんだぜ。

「やはり黒羽を討ち取るのは一筋縄ではいかんな…」

「いきなり死角から襲われる俺の気持ちを考えて欲しいんですが…」

一回千冬さんに剣を教えた時に、その延長線上で模擬戦をしたんだが、その時に俺が勝っちゃってよ。

それ以来千冬さんは対抗心を燃やして俺に仕掛けてくるんだわ。
毎回毎回死角から襲われる俺の気持ちを考えて欲しいぜ…

「断わる」

わお…見事な即答。

中断構え

千冬さんは正眼の構えで俺を見据える。

そしてお互いに相手を見据えて数分。

千冬さんが動いた。

「はあっ!!」

「——ふっ」

千冬さんは俺の胴体目掛けて竹刀を振るう。
俺は縦に斬り上げてその斬撃を弾く。

「くっ!」

「そこ!!」

竹刀を弾かれて隙が生まれた所に俺は竹刀を振り下ろす。
これが俺の戦い方。
長い得物によって相手より長い間合いを誇り、その間合いに入ってきた相手の得物を弾き、その弾かれた隙を斬る。
俺が前世で培った、あの混乱とした世界で生き残るために編み出した俺だけの技。

「この……程度で!!」

「うおっ!?!」

だが千冬さんはその決定的な隙を円を描くような綺麗な足捌きで覆す。

そのまま回転の力を利用して俺に逆袈裟斬りを放つが、俺はすぐさ

ま後ろに飛んで回避する。

まさか自分の剣を届かせるために、敢えて退かずに向かってくるとはな… …

やっぱり千冬さんはスゲえな。

ちよつと驚いたぜ。

「危ない危ない…。もうちよつとで一撃もらう所だった… …」

「ふん。そんな余裕の表情でよくいう。

この程度の攻撃…、お前なら造作もなく躲せるだろう」

それは買い被りつてやつだぜ。

今の攻撃はそれなりに焦ったんだぜ。

千冬さんの才能は本当に凄い。

あれは俺よりもあるな。あと十年もしたら追い抜かれるんじゃないか？

「そこまで過大評価しないでください。

それにしても千冬さんは日に日に強くなってますね。

どれ、俺もちよつとだけ本気を出しますか」

でも、一夏も筈もそうだが、千冬さんにも負けてやるつもり毛頭ない。

今はまだ俺が最強を名乗らせてもらう。

俺は自分の中にあるスイッチを入れた。

「——っ!!」

俺の雰囲気が変わった事に気付いたのか、千冬さんは表情を一層険しくする。

だが、こうなっちまった俺は並大抵の事じゃ止まらねえぜ？

「出来るだけ長く持ち堪えるんだ——。
せいっ!——はっ!!」

俺は瞬時に千冬さんを俺の間合いに入れて斬撃を繰り出す。

その数は2つ。一息の内に左右から2つの斬撃が千冬さんを襲う。

「くっ!……このっ……」

ほお……、あれを防ぐか……。さすが千冬さんだ。
なら、これならどうだ？

「そら、まだまだ行くぞ——。
シッ!——ふんっ!——どらっ!!」

今度の斬撃はその数を増やして3つ。
袈裟斬り、胴斬り、逆袈裟斬りの順番で千冬さんに襲いかかる。

「っ！… …… まだまだ！… …… あっ！？」

だが、最後の逆袈裟斬りを受ける時に千冬さんの手から竹刀が弾き出された。

まあ、あれだけの攻撃を受けたら手の力も保たんわな。逆によく堪えた方だ。

「… …… これで終わりですね」

「ああ… …… 私の負けだ」

切先を千冬さんに向けて試合終了。

こうして俺と千冬さんの戦いは幕を閉じた。

~~~~~

千冬さんとの試合が終わったあと、俺たちは仲良く4人でわいわいやっていた。

「千冬姉もすごかったけど黒兄もすごいな！」

途中から竹刀が見えなかったぜ!!」

「すごいです師匠!!」

2人は目をキラキラさせながら俺を見つめる。  
ヤメろヤメろ…。

そんな真っ直ぐな眼差しを向けないでくれ。  
眩しすぎるぜ。

「本当に黒羽は強いな。  
後半は手も足も出なかったぞ」

千冬さんは俺の事を褒めてくれる。  
こんな美人さんに褒められると少し照れるな…。

「千冬さんだつて強いじゃないですか。  
最近はメキメキと上達してきましたし、あと十年もしたら追い抜かれますよ」

「それは嬉しいことを言ってくれ。  
これも優秀な師匠がいたからこそだな。  
なあ、師匠？」

千冬さんはそう言って意地悪そうな笑みを浮かべる。  
この人、俺が師匠と呼ばれるのがイヤなの知ってて言うてくるんだ

もんなあ……。

「やめて下さいよ。」

別に、俺はただ「力を抜け」と「相手の全体を見る」としか言つてませんよ。

師匠らしい事はしてません」

「だが、お前の指摘があつたからこそ私はここまで強くなつたんだ。まだまだ黒羽には勝てないがな。」

お前には本当に感謝している。ありがとう」

飾り気のない言葉で千冬さんは感謝の言葉を言う。

その純粋な笑顔と真っ直ぐな瞳に思わず見惚れてしまった。

「ゴホンッゴホンッ!!」

話しはそれくらいにして。

今日の朝メシで卵焼きが上手く焼けたんだ。  
皆んなで食べよう」

「本当!?!」

「師匠の料理だ!!」

顔が紅潮しているのがバレないように咄嗟に話題を変える。

幸い2人はこの話題にすぐ釣れた。

だけど千冬さんだけは「むう」と頬を膨らまして不機嫌な声を出す。

くそ。可愛いじゃねーかコンチクショウ。

「それじゃいただきます！」

「あ、コラ！ズルいぞ一夏！」

そんな俺の葛藤も知らずに2人は卵焼きをパクつく。  
呑気でいいなあゝ…

「ほら、千冬さんも…」

俺はなんとか千冬さんの機嫌を直してもらったために卵焼きを千冬さんに差し出す。

「ああ…。いただく」

千冬さんもただどしくはあるが卵焼き掴んで口へと運ぶ。

「…美味しい」

短く、それでいて確かな言葉が聞こえた。  
よかった。これで「不味い」なんて言われたらトラウマもんだぜ。

「お前は本当に料理が上手いな。  
見かけによらず、意外な特技だな」

「一人暮らししてますから。  
それに“見かけによらず”は余計です」

そんな軽口を言い合いながらも楽しく時間は過ぎ去っていく。

筈だった――

「――クウウウロくうううん!!!」

「うげえええええ!?!」

突如ウサ耳が現れた。

比喩なんかじゃなく本当にウサ耳を付けた奴が現れた。

しかも俺の鳩尾に向かってヘッドダイビングしながら飛来してきや  
がった……。

マジで痛ええ… …

「超天才美少女。束ちゃん参上!!」

俺の鳩尾に飛来してきたウサ耳は俺の事などなんも気にせずに、まるで特撮ヒーローの登場シーンをマネするかのように叫ぶ。

こいつの名前は篠ノ之 束。

篝の姉にして生粋の天才… もとい天災であり、自分の興味のないものには何処までも無関心になる人格破綻者。  
まあ俺からしたらただの変態だ。

ちなみにこいつは千冬さんと同じ年だが俺はこいつにだけは敬語は使わねえ。

「あ、クロくん今失礼な事考えているでしょ？」

「別に、俺はド変態がやってきたなあって思ったのと、俺の鳩尾に激突してきたこの痴女を今すぐにでも斬りたいと思っただけだ」

「はっ!? 変態って呼ばれた! その後に痴女とか言われた!」

「安心しろ、他意はない」

「ううう…。ちーちゃん…。…。クロくんがいぢめるよおお…。反抗期だよおお…。…」

そんな事を宣いながら千冬さんに泣きつく。

分かったと思うが俺はこいつがキライだ。

こいつは色々な発明をしているんだが、その狂気の産物をよく俺に試す。

なんでも俺が「他の人より頑丈だから」っていう理由でこつちとしては勘弁してもらいたい。

「で、お前は どうしてここに来た？」

千冬さんは束の目的を聞いたです。  
もしかたよく分らんもんを俺に試そうとするのなら斬る。

「うんとね、それはね。」

クロくんの手料理の匂いがしたから駆けつけてきたの」

「——チッ」

「なんか舌打ちが聞こえた!？」

「碌でもない用件だったら斬ろうと思ったただけだ。

惜しい……」

「なんか平然とクロくんが怖いこと言ってるよおお……」

束はヨヨヨと言いながら泣く。まあ嘘泣きだけどな。皆んなも馴れたもんで華麗にスルーする。

「まあ、俺の料理を美味しいと言ってくれるのは素直に嬉しいからなほら、食えよ。そしてさっさと研究に戻れ」

好い加減このやり取りも飽きたので東にも卵焼きを差し出す。  
東は俺を色んな騒動に巻き込んでキライだが、嫌いじゃねえ。  
俺もなに言ってるかわからねえが、キライと嫌い。この違いをみんなは分かってくれると俺は信じている。

「わーい♪ぶつきらぼうだけど優しいクロくんは東ちゃんは大好きだよ」

表情を180°一変させて東も俺の卵焼きをパクつく。  
そつえばこの中で俺の料理を一番楽しみにしてるのって、よく見たら東なんだよな……  
今度なんか作ってやつか。

「やつぱりクロくんの料理は世界一だね。  
さっすが東ちゃんのお婿さん」

「——は？」

いきなりなに言い出すんだこいつは？  
ま、こいつの言う事だから冗談にきまつ——

「な！？ななな、何を言い出すんだ東！！」

で、何故に千冬さんが慌てるし…

「あつれ〜？なんでちーちゃんはそんなに慌ててるのかな？  
なんでかな？なんでかな？」

「ぐっ… …そ、それは… …」

千冬さん…俺をチラチラと見ないでください。  
俺に一体どうしろと？

「もしかして、ちーちゃんもクロくんの事が好きなの？」

「なっ！？」

「だあああああ！！その口封じてやる！！」

束の突拍子もない妄言に俺も動揺した。

ち、千冬さんが俺の事… …んな訳ねえ！

第一。俺なんか千冬さんと釣り合う訳ねえじゃねえか！！



~~~~~黒羽の訓練~~~~~  
私刑

「そらそらどうしたあ!!」

防ぐばかりじゃ勝てねえぞおお!!」

「ちよつ…無理無理!!」

竹刀が見えな——あああ!!竹刀が切られたあああ!?

黒兄ストップ!ストオオオオッブ!!」

「ん~~~~~?」

何言ってるか聞こえないな~~~~~?

おらおらあ!!休んでる暇なんかないぞおお!!!

死にたくなかったら馬車馬のように走れええ!!」

「ひっ!?黒兄!防具に切れ目入ってる!!切れ目入ってるよ!?
これ死ぬ!これ死ぬって!!」

「人は死んで初めて己とはなにかについて答えを見つけられるんだ
よおお!!!!」

「イヤだよ!まだ小3でそんな答え見つけたくないよ!!
できれば60歳からその答えを見つけないよ!!」

「誰が口答えしていいって言ったああああ!!!!」

「いまさらあああああああああ!?!」

~~~~~私刑訓練終了~~~~~

「あ~~~~~。スッキリした~~~~」

一夏との訓練が終わってなんだかスッキリしたぜ。

ん？一夏か？一夏なら床でピクピクしながらなんか「あ~~~~」…」  
とか言っただけだ。

死んでないし大丈夫だろ。

一夏も存外に頑丈になったな。

今度から束の実験台は一夏にさせっかな…

「——お、黒羽も終わったのか…」

どうやら束の制裁も終わったようだな。

束も床で這いつくばり「プスプス…」と湯気が登っている。

「千冬さん…良い仕事してますね」

「ふ…お前もな」

俺たちはお互いに拳をコツンと当てる。

なにかお互いに共有できるものがあると感じた瞬間だった。

「さてと、そろそろ戻るか」

「そうですね」

そして俺たちは道場を出て朝の訓練を終えた  
いまだ床に転がっている存在を放置して…  
…

ちなみにアノ2人は簞が残って甲斐甲斐しく世話をしていたらしい。

## 狂気の夜

あれから約4年の月日が経ち、俺たちは中学生となった。  
え？いきなり飛ばしすぎだった？

だって仕方ねーじゃん。

変わった事があるとしたら、束が世界を変えるような大発明をした。  
その束が行方不明になった。

そして篠ノ之家は一家離散してしまった。

その時に中国から留学生が来た。名前は凰 鈴音。

そして一夏が鈴のフラグを建設した。

とまあ、変わった所はそれだけだ。

ん？多過ぎるじゃねーかって？

仕方ねーな。じゃあ1つだけ、束の発明したやつを説明しよう。

正式名称 インフィニット・ストラトス

略式名称 IS それが束の発明したもんの名前だ。

現行兵器を圧倒的に凌駕する性能を持つ、今や世界最強の兵器だ。

ここまでの説明だと、前の世界の AC を思い出すな。

アレも俺の世界じゃ最強の兵器だったしな。

つと、話しがずれたな。

だが、このISには1つだけ問題があった。

ISは女性にしか反応しないのだ。

今や世界の中核であり要であるIS。

そして、そのISは女性にしか反応しない。

世はまさに男尊女卑ならぬ女尊男卑の世界へと変わってしまった。

おかげでこっちはいい迷惑だぜ。

今や“女性”というだけでISにすら乗れない女性も威張ってきや

がった。

なんか…こういうのは嫌いだ。

努力すらない奴が偉いなんて到底納得できない。

それが許されるのは子供だけだ。

ああいう奴等を見てると前の世界の「ろくでなし共」を思い出す。

「黒羽…少し殺気を抑えてくれ。  
息苦しくて堪らない」

おっと、つい殺気がにじみ出ちゃったみたいだ。  
ちなみに俺の隣にいるのは織斑 一夏。

ようやくコイツも俺を黒兄と呼ぶのをやめてくれた。

あの時は嬉しくて試合中に一夏の防具を真つ二つに斬っちゃった。  
あと数cmズレていたら一夏が死んでいたな…

「おっと、済まん済まん。  
少し考え事をしてな。つい……」

一夏に指摘されてすぐに殺気を収めた。

俺の殺気から開放されて一夏の呼吸も大分楽になる。

「…黒羽の考え事は一々殺気を出すものなのか？  
その殺気を受ける俺の気持ちの事も考えてくれよ……」

「だから済まんって言ってるだろ。」

それに、この程度の殺気で狼狽えるな。  
俺の本気の殺気はこんなもんじゃすまねえぞ」

「マジかよ………」

「マジだ。本気と書いてマジだ」

全く、一夏は口も達者になってきたな。  
それにこんなシヨボい殺気を受けたくらいで情けない……  
あ、そっか。一夏はあまり殺気を受けた経験が無いんだよな。

「一夏…帰ったら殺気に馴れる訓練をしような」

「げっ………」

「なんだ？そのあからさまな嫌そうな表情。  
まあ、別にお前が嫌ならしないがな。強制はしないさ。  
お前の“強くなりたい”と言った言葉が嘘ならな」

「…それを言われたら断れないの知ってるだろ……  
でもやるさ。確かにイヤだけど、嫌ではないさ」

「よし、素直でよろしい」

そんな話を話しながら、俺達は空港のロビーを出た。  
あ、言い忘れてたが俺達は今ドイツにいる。  
なんでも、IS同士で競うISの世界大会。【モンド・グロッソ】

が、ここドイツで行われることになったんだ。

出るのは勿論、織斑 千冬さん。

ちなみにこのモンド・グロッソはこれで二回目で、第一回のチャンピオンは千冬さん。

ここで優勝すれば二連覇の大偉業だ。

やっぱり千冬さんはスゲえぜ。

千冬さんはブレード一本で世界一の座に登りつめたんだから。

ブレード一本で最強のレイヴンにのし上がった俺を思い出して少し懐かしかったなあ…

…

「さてと、会場は… … あっちか」

会場を見つけるために周りを見渡すと、会場はすぐに見つかった。

野球場を遥かに超える大きさ。

沢山の人が押し寄せ長蛇の列を作っている。

ここが第二回モンド・グロッソの試合会場。

「ほら、さっさと行くぞ一夏。

もし遅れたら千冬さんに怒られる。

お前が怒られるのは別にいいが、俺が怒られるのは困る」

「うわ、サラッとヒドイこと言いやがる」

そんな軽口を言い合いながら俺達は会場へと向かった。

ちなみに俺達は出場選手の親類って事で別口から入れてもらえた。

いやゝ。さすがに俺もあの長蛇の列に混ざりたくなかったから並ば

ずに済んで良かったぜ。

~~~~~

「いや、スゴかったな、千冬さん。」

俺は千冬さんの試合が終わったあとにそう呟いた。

いや、本当にスゴいんだわコレが。

今まで千冬さんの試合はTV中継とかでしか見れなかったんだけど、実際に見てみるとより一層スゴイ。

—— 一機無双

まさにこの言葉がしっくりくる。

他を全く寄せ付けない無類の強さ。

ブレードたった一本で銃器を打ち破る。

その姿は前の俺が戦っていた姿と同じだった。

いや、前の俺は色々と泥くさい戦いをやっていたからそれ以上だな。

「だな。本当に千冬姉はスゴいよ。自慢の姉さんだ」

一夏も俺の言葉に肯定して「うんうん」と言っている。

たった今、準決勝が終わって休憩中。

あと2、30分もしたら決勝戦だ。

相手の方も一応見ていたが、このまま行けばまず間違いなく千冬さ

んが勝つな。

そうすれば世界大会二連覇だ。

「あ、今の内になにか、つまめるもんでも買つか。

黒羽、お前は何かいい？」

「お、悪いな。それじゃあホットドック。それとコーラ」

「あいよ」

そう言つて一夏は売店の方に行つた。

まあ、注文は全部ボタンを押せば頼めるし、言葉も21カ国に対応しているから一夏でも買えるだろう。

にしてもこの会場も中々にスゴいよなあ…

設備は全て現行の最新設備を設置しているし、試合映像は立体映像で投影される。

それに売店の規模もかなりデカイし、ポップコーンから始まりケバブ。

果ては寿司も取り扱っている。

その取り扱っている商品数の多さに沢山のお客が集まっている。

ほら、そう言っている内にまた1人、ポロシャツを着たおっさんも売店に——ッ！？

おかしい…

いま俺の後ろを通り過ぎたおっさんはあまりにおかし過ぎる…
おっさんが俺の後ろを通り過ぎる瞬間…

その一瞬の間に様々な情報が俺の中に入ってきた。

明らかに異常すぎる鉄の匂い。

おそらくは刃渡り20cm程のナイフ。

それに鉛の匂いと一般人じゃ絶対にしねえ火薬の匂い。

それから察するには拳銃。

最初は軍人かと思ったが歩き方や構えが荒すぎる。

このおっさん――

――真っ当な人間じゃねえっ

放置するのはあまりに危険。

この会場には大勢の観客達がいる。

そんな所で乱射事件なんて起こしてみろ。

あつという間に地獄絵図の完成だ。

俺はおっさんに気付かれないように少し離れたところで尾行していた。

~~~~~

俺が尾行を開始してから6分。

ついにおっさんが動いた。

クソったれな事におっさんの目的は一夏だった。

おっさんは一夏を呼び止めて人気のない場所まで誘導して睡眠薬が  
なんかの薬を嗅がせて一夏を眠らせた後、そのまま黒いワゴン車で  
トンスラこきやがった。

俺は人ごみで上手く動く事が出来ず、誘拐を阻止できなかった。

「クソが！こんな事なら一夏に人を見極める訓練をしとけばよかった！！」

だがそんな事を言っても現状は変わらない。

今は“たら・れば”を言うよりも一夏を助けなければ！！

一夏を誘拐した理由はおそらく千冬さんの大会二連覇を阻止するた

め。

この世界大会で優勝した国は他国よりも大きなアドバンテージを得る事になる。

なにせ今はISが中心で世界が回っていると言っても過言ではないからな。

そして千冬さんが大会を二連覇すれば日本は強大なアドバンテージを誇る事になる。

それを快く思わない国はごまんという。

だから唯一の肉親である一夏を誘拐して決勝戦を棄権させるつもりなんだろう。

「だが、そんな事はさせねえ……」

一夏を助けて千冬さんの栄誉も守る。

なにより俺の大切な家族を傷付ける事は何があっても俺が許さねえ

……

そのためなら俺は【狂気の夜】として敵を殺す。

そもそも俺の業はそのためにあるんだ。

「さあ……行くぜ……」

俺は心を絶対零度の冷徹さに変えて、家族を傷付ける奴等を塵殺するため、街中を驚異的な速さで駆け抜け車を追った。

~~~~~

「此処か… ……」

ワゴン車を追ってみれば、会場から少し離れた廃倉庫についた。
最初は追い付けるかどうか不安だったが、この世界大会のおかげで
沢山の車も押し寄せて軽い渋滞状態になっていて思いのほか楽に追
跡できた。

「人数は… ……外に4人…中に6…7… ……8人の計12人か…
…」

俺は地面に耳を当て、その響きから人数を割り出す。

これも前の世界で培ってきた技術だ。

AC乗りにとって…特に有名なAC乗りにとって最も怖いのがAC
に乗る前の襲撃だ。

如何にACを巧く操ってもACに乗らなければただの人間。

かく言う俺も数えるのが億劫になるくらい襲撃を受けた。

それにACじゃ活動出来ないような所でミッションもやっていたし
な。

これくらい出来て当たり前だ。

「さてと… ……1人を殺してからチンタラしてると中にいる奴等に
怪しまれて一夏が危険になる。

まずは1人。そのあと速攻で他の奴等も片付ける」

見た感じ、常に無線でお互いを確認しあっている様子はない。これで難易度は更に低くなった。

だが、軽くみない、慢心はしない。自分の持てる力を全て出す。迷いはない、躊躇しない。一切の後悔もなく相手を殺す。

今の俺は世界最狂の【狂気の夜】なのだから…

「ん？…なん——ガッ」

ワザと物音を立てて男を誘き出し、即座に男の背後に着いて首の骨を折る。

そしてすぐに男の武器を奪う。

まず、刃渡り20cm程のナイフ。

そして拳銃はベルギーのFN社開発の ファイブ・セブン Five - seven。

装弾数は20発でマガジンが2個。

確か、貫通力が高すぎるって理由で政府組織か法執行官しか販売されてない筈だ。

よくもまあ、こんな危ないもん手に入れたな。

だがこれで手持ちが楽になった。

まずは1人。ここからは時間の勝負だ。

なに、俺は暗殺任務を請けおっていた事もある。

馴れたもんさ…

「——あがつ」

2人目は後ろに回って喉元をナイフで切り裂き…

「——がは」

3人目は1人目と同じように首の骨を折り…

「——ぐふっ」

ラストは喉にナイフを投擲し絶命…

男達は叫ぶ暇なく死んだ。

ここまでで要した時間は1分未満。
な？ 馴れたもんだろ？

「後は中にいる奴等を殺すだけ。

試合開始まであと15分ちよい。

いや、決勝戦だから確か挨拶があつた筈だ。

それを考慮して約30分。お釣りが返ってくるぜ」

俺はより一層気を引き締めて、倉庫の中へと歩みを進めた。

一夏side

「……くそ」

俺は自分の不甲斐なさに憤った。

売店で買い物をしている最中に俺は誘拐された。

誘拐犯の話しを盗み聞きした所、どうやら千冬姉の優勝を阻止するために俺を誘拐したみたいだ。

これじゃあ千冬姉に迷惑をかけちゃう…っ

なんのために… なんのために俺は今まで鍛錬してきたんだっ！！

「… … …ッ」

俺は悔しさのあまり唇を噛み締める。

情けない… あまりにも情けない… …

自分の無力さに腹が立つっ… … …

「—— お、おい！ なんだデメエ—— ガハッ」

すると、突如男達が声を荒げた。

俺も何事かと思つて視線を向ける。

そこにいた人物は——

「—— よお、一夏。

俺のホットドックとコーラはどうした？」

俺が…俺達が最も懂れる人物。
その強さを目標としている俺の兄貴分。
真鴉 黒羽だった。

黒羽 side

「———よお、一夏。
俺のホットドックとコーラはどうした？」

これと言った策が見つからず、俺は正面きつて入ってきた。
ちなみに最初に声を出したヤツは喉切つて殺した。

「な…なに馬鹿なこと言つてんだよ！？
この状況見てからもの言え！！」

む？ジョークを言つて和ませようとしたが怒られた…
一夏はもう少し柔軟な脳みそとジョークを受け止めるデカイ器をだ
な———

「テメエ、なにもんだ！？
どこから入つてきやがった！？」

そしてなに人が考え事してる時に話しかけてきてんだお前は。

しかも質問の内容が頭悪すぎんだよ…

「どこからって…見ての通り正面からだろ」

「み、見張りがいた筈だぞ!」

「んなもん殺したに決まってるだろ…
お前頭悪すぎ…」

はあ…
…
なんか見た感じこいつがボスっぽいな…
…
超小物だな。そういえばあまり時間が無いんだった。

——よし、すぐに殺そう…
…

「うるせえ…」

《——パンツ》

俺の腕から乾いた破裂音が響いた。
それと同時に男の頭から赤い液体とピンク色したゼリー状のものが
飛び出した。
そして遅れること数秒。男はもはや血と肉が詰まった、ただの袋と
して地面に落ちた。

「そ、そんな…ボス…」

やっぱりこいつがボスで間違いなかったみたいだな。
下っ端どもが慌ててやがる。

「お、俺はもう下りる！これ以上付き合ってられねえ！！」

「そ、そうだ俺も！！」

おいおい…
ボスが死んだ瞬間に尻尾まいて退散かよ…
まあ、頭が死んじゃ確かに終わりだろうけどよ…

——この狂気俺の夜が許す訳ねえだろ…

「なに巫山戯たこと言ってるやがる…
デメエら全員皆殺しに決まってるだろ…」

それから乾いた破裂音、計6回。
後に残ったのは俺と一夏だけの2人となった。

「さてと、これで終わり。

一夏。怪我ない——」

「何でだよ……」

「ん？どした？」

「なんでそんな簡単に人を殺せるんだよ！？
なんでいつも通りに笑っているんだよ！？
人を殺したんだぞ！？」

「………一夏——」

「く、くるな！！」

「——ッッ！——！」

その目……

拒絶の意思が込められた目……
俺はその目を知っている……

——あの目は俺を恐れている目だ。

前の世界で助けてきた人達に散々浴びせられた目だ。

そっか…そうだもんな…

人を平然と殺す俺が恐くない訳ないよな…

例えこの世界でも…いくら善人面しようと…所詮俺は人殺し。

この手は血の色に染め上げられている。

今更…覆しようがない…

「…分かった」

長い沈黙のあと、俺は一夏にナイフを投げる。

「それを使つて早く会場に向かえ。

千冬さんが心配する」

こうなつた以上、もう俺はここには戻れない。

別に皆んなのヒーローになりたかつた訳じゃない。

恨まれるのも拒絶されるのも馴れた。

あとは俺が消えればそれで全て収まる。

時間はあと20分以上ある。

歩いても充分に間に合うから大丈夫だろう。

俺は一夏に背を向けて歩き出そうとした、その時――。

「――へえ……随分と凄くないか。餓鬼」

突如空から声がした。

俺が空を見上げると、そこには――

「I……S……」

八本の脚を生やした。まるで蜘蛛を思わせるような機械。
世界最強の兵器。ISが俺の目の前にいた。

撃たれる鴉（前書き）

オータムのアラクネって画像とかで出てないんですかね？

なんかよく分からないから妄想で書いてしまいました。（いつも妄想だけど．．．）

あと、オータムのキャラも上手く把握出来ませんね．．．

Wikipediaだと口が悪くて短気としか書いてなかったのだから．．．

まあ、いつも通り妄想100%で書いてますので、どうぞ。

撃たれる鴉

黒羽 side

(マズイ………)

俺は目の前の相手を見て焦っていた。

まさか現行兵器最強を誇るISが出てくるなんて想定外すぎる。

だが、それ以上にヤバイのはISに乗っている女の方だ。

肉食獣を思わせる獰猛な目。体から漏れだす血の匂い。

この女……俺と同じ「ろくでなし」だ。

人を平気で殺す、度し難い「狂人」

この手のヤツは目的のためなら息をするかのように人を殺す。

俺と同じでな……

「一夏……そこに置いてあるナイフを使ってすぐに逃げる……」

「え……？」

「いいから早く逃げろ！！死ぬぞ！！」

俺は声を荒げて怒声を飛ばす。

相手の実力は未知数だが伊達に世界最強の兵器を名乗っている訳ではない。

相手の目的次第では一夏は死ぬ。

それだけは何としても避けなければいけない。

「——んな事させつかよ」

だが、その願いは叶わなかった。

女のISから突如爆音が鳴り、ナイフは跡形もなく吹き飛んだ。

「はっ、餓鬼の小細工が通用する訳ねえだろ」

「・・・・・・クソ」

「その織斑一夏つてえのは今回の依頼の要でな。

逃がさず、殺さずに、ってのがウチのスポンサーのご要望だ。

逃がすつもりはねえよ」

・・・成る程・・・これはいい事を聞いた。さっきの情報
は勝機の光だ。

この女は一夏を殺すつもりはない。

なら、戦略の組み立てが可能だ。

大丈夫だ、勝てる。勝利の糸は確実に手繰り寄せれる。

「だがそれ以外は特に指示されてねえ。

だから餓鬼。死んでくれや」

女は凶暴な笑みを浮かべてその八本の脚を俺に向ける。

上等．．．お前的人格、性格は理解した。

これで勝利の戦略は完成した。後はお前を引き寄せるだけだ。

「おもしれえこと言うな小娘。」

なにそんな程度のオモチャ持ったぐれえで悦に浸ってんだよ。

ようやく飛べるようになった雛鳥風情が大鴉に勝ったつもりか？

おら来いよ、さっさと来いよ。格の違いってヤツを教えてやる」

「デメエ．．．．．餓鬼ツ．．．．．殺す！！！」

よし、乗った．．．．．

これで策の第一段階は終了だ。

後は期をみて随時次の段階に引き込む。

兵器は所詮兵器であって、戦闘のアドバンテージには足り得るが、それ単体が戦闘の勝敗を決めるものではない。

その事を俺が教えてやるよ。同じ「狂人」の先輩としてな。

勿論授業料はお前の命で払ってもらうぜ．．．．．

「さあ来な！かわいい雀ちゃん！！^{スーパーロウ}」

その羽を筆取り取ってやるよ！！

精々チュンチュンとかわいく囁っているんだなあああ！！！！」

「言ってるや餓鬼があああああ！！！！」

女はより一層怒りを露わにして俺に向かってくる。
こうして世界最強の兵器ISと、世界最狂の狂気の夜との戦いが幕
を開けた。

s i d e o u t

「——死ねや餓鬼イ!!」

まず戦闘の口火を切ったのは女の方だった。

女は黒羽に向かって一直線に飛び、その、人を殺すのに充分過ぎる
凶器である脚で黒羽を串刺しにせんとして突き刺す。

だが女の使用する脚の数は一本。

それは人間の相手ごときに本気を使いたくないという彼女のプライ
ドか、或いは人間程度の敵に本気を出すまでもないという彼女の慢
心か、それは彼女自身にしか分からない問いだろう。

わかる事はただ一つ。黒羽相手にその行動は軽率だったという事だ
けだ。

「なんだ？攻撃なのか、それ？」

黒羽は体を捻って女の刺突を回避する。

そして女に向けて容赦なく銃を突き付け引き鉄をひく。

発砲音の数は計6つ。

頭に2発、心臓に2発。凶悪犯罪者を一瞬で射殺するために主にアメリカで使われてる射撃法（コロラド撃ちと言う人もいる）で、そして2発は脚の関節部分に外れてしまった。

「っ．．．んの餓鬼やああ！！！」

だがISが最も誇るものは使用者を守るその防御性能。

女に向けられて放たれた弾丸は女に届く事なく、シールドに阻まれて力なく地面に落ちた。

女は自分の攻撃が躲され、そして逆に攻撃された。

この屈辱的な2つの出来事によって更に憤慨の表情をみせる。

女は自分の憤怒の感情をその脚に乗せて、黒羽を潰そうと大きく脚を振り下ろす。

「おいおい、子供のお遊戯か？」

その必殺の一撃を黒羽は嘲笑を浮かべて避ける。

そしてお返しだと言わんばかりに銃を撃つ。

頭、喉、そして心臓。数発は脚に当たってしまったがその攻撃は全て急所を狙い澄ましていた。

「はっ、なんだその動きは？」

お前ヤル気あんのか？

まさか戦闘^{ヴァーシ}処女じゃねえだろうな？」

黒羽は銃のマガジンを変えながら女を挑発する。
その顔はまさに嘲りの表情だった。

「殺す．．．．．殺す．．．．．殺す．．．．．殺すッ
！！！！

テメエだけは殺す！！絶対に殺す！！何があっても殺すッ！！！」

女の顔はこれ以上ない程に憤怒の表情で塗り潰されて歪む。
女の口から吐き出される言葉はもはや呪詛となっていた。

これが．．．これこそが黒羽の策だとは思わずに．．．．．
ズルズルと、ゆっくりに．．．女は黒羽の術中に落ちて行く．．．
．．．

「好い加減に死ねやああ！！！」

女はありったけの憤怒を乗せて黒羽を叩き潰す。
だが女の攻撃は感情が大きくなるのに比例してどんどん大振りになっ
ていく。

「遅えよ。阿呆」

だがそんな予備動作見え見えの攻撃など躲すに容易い。

黒羽は難なく避けて銃を撃つ。

女が脚を振り下ろした地面には小クレーターが出来上がり、女の攻撃の威力の高さを物語っている。

だが黒羽には当たらない。

一発さえ当たればすぐに終わる。だけどその一発が当たらない。

それが余計に女を苛立たせる。

「戦闘処女ヴァージンって言われてキレたか？
ブレイガール

戦闘殺人者を証明したいなら俺を殺してみろよ。

さあ、俺はここにいるぜ。お前の眼前に立っているぜ。俺を殺してみな。

お前に．．．お前程度に出来るんだったらな．．．．．」

「こ．．．こんつの餓鬼がああ．．．．．

こつちが下手に出てりや調子に乗りやがってえええ．．．．．

舐めくさんのも大概にしるやああああ！！！！」

もはや女の感情は憤怒とは呼べず、それは憎悪にまで膨れ上がっていた。

こめかみは痙攣を起こし、血管はもう破裂寸前。

女はもう冷静な判断を下せない状態まで掻き回されていた。

これが黒羽の狙っていた策だった。

黒羽はこの女がかなりの激情家だという事を見抜いていた。

だから黒羽は女をこれでもかと言つくらいまで怒らせて攻撃を単調にさせたのだ。

『激情は最大の敵。冷静は最高の戦友也』とは誰の言葉だったか．．

．．．

黒羽は見事に『冷静』を戦友に、『激情』を相手に差し向け、勝てない相手を、勝てる相手にまで引き下げたのだ。

だが、言うは易く行うは難し。

黒羽の行っている行為は超危険な綱渡り。

一歩間違えれば己が人体ミンチになるような事をやっているのだ。そんな事をして冷静でいられるのは彼が培った経験の賜物だろう。

「やめだ．．．もうやめだ！！」

これ以上テメエに付き合うつもりはねえ！！

こっからは本気でぶち殺してやるよ！！」

だが、これ以上コケにされれば女も黙ってはられない。

黒羽への憎しみのために、このどうしようもない殺意を鎮めるために、女はとうとう背中にある全ての脚を黒羽に向ける。

今までは一本だったから何とか立ち回ってきた。

だが、今やその数は8倍の八本。

いくら女が冷静な判断を下せない状態でも、その数を増やせば補うに余りある。

黒羽の勝率はもはや0に近いと、誰が見ても思っだろう。

だが．．．．．

「——ニイ」

黒羽は静かに、一瞬しか分からなかったが確かに笑った。
まるでこの展開が初めから分かっていたかのように．．．
こうなる事を待ち望んでいたかのように．．．

「それがお前の本気か．．．いいぜ。来いよ」

もう女を挑発する必要がなくなったのか、黒羽の語気は幾分穏やかなものへと変わった。

黒羽は手に持った拳銃を捨て、代わりにナイフを二本手に持つ。
そして女に悟られないように静かに息を整えていく。

「これで．．．終わりだああ！！！」

女はこれで終わりだと思ったのだろう。

その顔には歓喜の表情が浮かんでいた。

それはそうだろう。女がこれから繰り出す斬撃の数は8つ。
対して黒羽の斬撃の数はどこをどう見ても2つ。

この構図を見れば小学生でも女が勝つと分かるだろう。

目の前に厳然とある現実を覆しようがない。

黒羽を斬殺せんと八方向から“現実”が襲ってくる。

だが――

「――せやあつつつ！！！！！」

“現実”は“奇跡”の前に呆気なく消えた。

黒羽は一息の内に4本．．．計8つの斬撃を生み出した。

その8つの“奇跡”は、女の8つの“現実”を弾く。

彼の十八番である弾く斬撃だ。

だが、その奇跡の代償として、ナイフは粉々に砕け散った。

ISと普通のナイフでは材質から根本と異なったために砕けたのだらう。

そのまま黒羽はISの横に潜り込み．．．．．

「——コレ、貰うぜ．．．．．」

あろう事がISの脚を？ぎ取った。

まず黒羽はISの脚を脇に挟み、そのままグルンと縦に回って、まるで蜘蛛の脚を捻じり切るかのように？ぎ取った。

「なっ！？．．．．．なんだと！？」

女もさすがにこの常識外の出来事に目を丸くした。

絶対の好機であり、確実に仕留めるはずであった8つの斬撃。

それを無情にも弾かれ、次に主武装である装甲脚が破壊されたのだ。それも生身の人間がだ。

女の頭の中は混乱でグルグルになっていた。

だが、これにはちゃんとタネも仕掛けもある。

いくら黒羽が人間離れた技術を持っていたとしてもISの装甲を破壊する事は不可能だ。

そこで皆んなに思い返してほしい。
不思議に思わなかっただろうか？

あの黒羽の精密すぎる射撃。寸分変わらず急所を狙い撃っていた。
なのに何故、時折黒羽の弾丸は外れていたのか。

黒羽の腕なら全弾急所に当てる事も可能だった。

だが黒羽の弾は外れた。しかも外れた場所は全て脚の関節部分・・・

・・・
もうお気付きだろうか？

黒羽の弾は外れていたんじゃない。しっかりと命中していたのだ。

——最も弱い関節部分に・・・

そう、急所への射撃は全てフェイク。

本当の目的はこの脚を奪う事だったのだ。

それを悟られないために急所への射撃を繰り返していたのだ。

ファイブ・セブン

黒羽の使った拳銃はFive-sevenという拳銃。

弾の形はライフル弾をそのまま小さくしたような形で先端は鋭く尖り、100m離れた所で撃つてもボディーアーマーを貫通しうる程の高い貫通力を誇っている。

それをゼロ距離で十数発も受けたのだ。しかも最も弱い関節部分に・・・

いくらISでもそれは耐えられなかったのだろう。

結果、黒羽によって脚は？ぎ取られてしまった。

「ほお・・・これがISの武装か・・・

俺の使う大太刀と同じ長さだな・・・しっくりくる」

黒羽は脚だったものを掴み、確かめるように振る。
どうやらお気に召したようだ・・・

「さてと．．．これでお前と同じ土俵に立ったって訳だ．．．
．．．

「そんじゃま．．．行くぜ？」

黒羽はここが最大の勝機と悟ったのか、初めて自分から相手に向かう。

その大太刀を携える姿はえらく堂に入っていた。

「く、来るな！来るんじゃねええ！！」

女の顔にはもはや恐怖しかなかった。

女は黒羽の策が分からなかったから力だけでISの脚も？ぎ取ったのだと思ったのだろう。

ここまでくれば体裁なんか関係ない。

残った七本の脚を黒羽にむけて銃火器を乱射する。

だが黒羽は前に一夏にこう言った事がある・・・

——もっと全体を見るように心掛ける。

「そうすれば剣だろうが銃弾だろうが余裕で避けられる」と。

そして、その言葉は違える事なく現実のものとなった。

「うおおおおおおおっ!!」

黒羽は雄叫びを挙げて弾雨の嵐に突っ込む。

普通ならあつという間に八子の巢にされ、自らの血肉が辺りに散乱するだろう。

だが黒羽は当たらない。その鉛弾が押し寄せる死の嵐を黒羽は避ける。

必要最低限の動きで躲し、時には大太刀で防ぎながら、黒羽は不回転の覚悟を以って突き抜ける。

「これでっ……」

「ひっ!？」

そして黒羽は女の眼前に立ち、大太刀を振り上げた。

女は残る七本の脚を総動員させて黒羽の攻撃を防ごうとする。

相手の一に対してこちらは七。純粋な質量差ではこちらが圧倒的に上だった。

だが黒羽は、もう一人の幼馴染みである箒に以前こう言った事がある。

『——力を抜けば抜く程、剣の一撃は鋭くなり重くなる。その気になれば鉄塊をも斬る事が出来るぞ』と。

そして、その言葉も違う事なく現実のものとなった。

「――終わりだあつ!!!」

「がはっ！」

振り下ろされる白刃の一閃。

ISの七本ある装甲脚は一閃の下に切断され、衝撃はそのまま女に伝わり吹き飛ばされ、壁に激突した。

「はぁ．．．はぁ．．．。これでチェックメイトだな」

黒羽は数呼吸して息を整え、止めを刺すために女の方に歩み寄る。

「クソが．．．何だつてんだよ．．．．．お前は一体何なんだよ!？」

「．．．おれはただの狂人さ。お前と同じな。守りたい大切な人達のために人を殺す度し難い狂人さ」

「守りたい．．．だと？あの小僧の事か？あいつはお前を否定したんだぞ。なのに何故お前は守ろうとする!？」

「．．．．．例え一夏が俺を否定しても、俺にとっては守りた

い存在である事には変わらない。だから俺は守る」

女の言葉に一瞬辛そうな表情をする黒羽。

おそらく拒絶された時の事を思い出したのだろう。だがそれでも彼は止まらない。

「——守りたい・・・か。ならこんなのはどうだ？」

「ッ!？」

黒羽の言葉を聞き、女はこれまでの表情を一変させ、喜色の色を浮かばせて凶笑する。

ISの特徴の1つとして、武器を量子化して機体に保管できる能力がある。

女の手には光の粒が集まり、やがて1つの銃器となった。

「守ってみせな。狂人」

そして女は引き鉄を引いた。

あろう事が殺すなと言われた一夏に向かって・・・

一夏side

——怖かった。

なんの躊躇いもなく、当たり前のように人を殺す黒羽が怖くてたまらなかった。

例え俺を助けるためだとしても、逃げた誘拐犯まで殺すのは俺には到底理解できなかった。

そして俺は黒羽を拒絶した。

もしかしたらそこで俺は殺されるんじゃないかと思ったけど、黒羽は俺の側にナイフを投げてそのまま立ち去ろうとした。

その時、いきなりISが現れた。

もう駄目だ………

世界最強の兵器ISが出てきた瞬間、俺はもう助からないと諦めた。

だけど黒羽は諦めていなかった。

黒羽はISと向き合い、真っ向から勝負した。

無謀だと思った……。いくら黒羽でもすぐに殺されると思った。

でも黒羽は生き残っていた。

ISの攻撃を紙一重で避け、その隙に銃を放つ。

一撃即死の嵐に身を置きながらも、黒羽は終始戦いを有利に進めていた。

そして、なんと黒羽はISの脚を？ぎ取ったのだ。

その？ぎ取った脚を大太刀にして、黒羽はISに突っ込んでいった。

ISは銃火器を乱射したが、黒羽はその弾幕を避けてISの目の前に立ち、七本の脚を一刀の下に斬り伏せた。

以前、黒羽が言っていた『——相手をよく見れば銃弾だって躲せれる』や、『——その気になれば鉄塊だって斬れる』を思い出した。

あれは全部本当の事だったのか．．．

黒羽はISの方に歩み寄る最中、操縦者の女となにか言い合っていたが、ここからだとしき聞き取れなかった。

そして、あともう少しの所で黒羽がISの所に着こうとした時、女は突如銃を取り出して俺の方に照準を向けた。

俺は縛り付けられてて動けない。

引き鉄を引かれれば俺は間違いなく死ぬだろう。

色んな出来事が走馬灯のように頭を駆け巡った。

ISの方から発砲音が鳴り響き、俺は無駄だと分かりながらも目を瞑った。

「．．．．．」

おかしい．．．

さつきから全然衝撃が来ない．．．

もしかしてもう死んだ？

いや、それだったら縛られてる感覚もなくなっている筈だ。

という事はまだ俺は生きている事になる。

（一体なにが．．．）

そう思い、俺は恐る恐る目を開けた。

「なっ！？・・・そんな・・・な・・・」

そして俺は目の前にある光景を疑った。

「 . . . < . . . じゅん . . . 」

俺の目の前には体からおびただしい程の血を流し、足元に血の池だまりを作りながら、黒羽が直立不動で立っていた。

「な．．．なんで．．．お前が．．．」

[illegible]

俺の問いかけに黒羽は答えない。

その代わりに赤い雫が池だまりに落ちて音を出す。

「ア．．．ハハ．．．．アッハッハッハハハハ！！！！
こいつ．．．本当にこの小僧を守りやがった！！」

女は狂った笑い声を上げる。まるで面白い出来物を見ているみたいに。

それよりもこの女は何を言った？守る？

「そんな．．．．．それじゃあもしかして．．．．．」

「ああそうさ！こいつはお前を守るために身代わりになったんだ。

「守りたい人」とか抜かしながらな．．．。

良かったな小僧。この馬鹿のおかげでお前は助かったんだぜ．．．。
クックククク．．．．．」

そんな．．．。黒羽は俺を守るために．．．。
黒羽を拒絶した俺なんかのために．．．。
なんで．．．．．なんで．．．．．。

「おっと、もうこんな時間か。
これで取り敢えず依頼は完了だ。
じゃあな、糞餓鬼ども」

それだけ言つて、女は逃げていった。
後に残ったのは縛られてる俺と、血に濡れた黒羽だけだった。

「．．．．．黒羽．．．．．なあ、黒羽．．．．．
」

俺は黒羽に呼びかけるが、黒羽は答えない。

黒羽は俺を守るために身代わりになった。

それなのに．．俺は黒羽を怖れていた．．拒絶してしまった．．

後悔と自責の念が俺の頭の中をグルグルと駆け巡る。

「黒羽．．答えてくれよ．．なあ、黒羽っ．．．」

黒羽に謝りたい．．．

怖がった事を謝りたい、拒絶した事を謝りたい。

俺を守ってくれた事に感謝したい．．．

俺の目から涙が流れてくる。

でも黒羽は答えない、答えてくれない。

まるで死人みたいに――

「あ．．．」

そう思った瞬間に俺の中のナニカが決壊した。

黒羽は．．黒羽は．．黒羽は．．黒羽は．．黒羽は．．

俺を守るために．．．

死んだ
・
・
・
・
・
・
・
・
・

[illegible]

まるで壊れたダムみたいに様々な感情が押し寄せ。
俺の精神は崩れた。

撃たれる鴉（後書き）

黒羽、黒羽って．．．なんか流し読みすると関羽って見えませんか？
え？違う？そうですか．．．．．

取り敢えずこれで一回戦闘描写は終わりです。
拙い文でしたけど如何でしたか？

あと、ISって武装に対しての攻撃にシールドって張りましたっけ？
漫画だとよく分からないんですよ．．．．．
もし武装に対してもシールドを張るのならこの戦闘は矛盾しますが、
そこは突っ込まないでください。

あと一話書いたら本編に突入させるつもりです。
作者お得意のご都合主義で。
それでは皆さん。また。

帰る場所・・・（前書き）

ハッハーツ！！

一睡もしないで執筆したぜ！！

もう無理限界死ぬ！！

いつも通りカナリおかしい所があるけど見ておくんなせえ！！

帰る場所

千冬 side

弟の一夏が誘拐されたと聞き、私は決勝戦を棄権して一夏の救助に向かった。

ドイツ軍から一夏の監禁場所を教えてもらい、すぐに救助に向かったのだが

「なっ! ? これは」

私は目の前に広がる惨劇の光景に言葉を失った。

誘拐犯と思われる男達の死体。外にも4人の死体が転がっていた。そして所々にある生々しい銃痕。

それらが事態の凄惨さを語っている。

だが、それよりも酷いのが

「一夏 黒羽」

茫然自失状態の最愛の弟と、私が最も憧れる偉大な人物。真鴉 黒羽が血の海を作りながらも尚屈せず直立不動で、まるで一夏を守るように立っていた。

「黒羽っ！．．．おい黒——っ！？」

私が黒羽に近付いた瞬間、途方もない程のプレッシャーが私を襲った。

私はそのプレッシャーを受け、まるで心臓を鷲掴みにされたみたい
に動けなくなった。

私はこのプレッシャーを放出した人物がすぐに分かった。

目の前にいる黒羽がこのプレッシャーを放った人物だった。

なんとという精神力か．．．．．

体は既に死に、意識すら無いというのに心は全く死んでいない。

黒羽から感じる想いは、「守りたい」の純粋な想いだけ。

その想いだけで黒羽はこの血の海で屈する事なく立ち続けた。

まるで英雄録から出てきた英雄のように。

私はその姿を美しいと思ってしまった．．．．．

「って、なに場違いの事を考えている！！

聞こえるか医療班！重傷者が一名いる！！

しかも瀕死状態だ！すぐに来てくれ！！

いいか！何があっても助けるんだ！！」

ISのセンサーで生命反応は辛うじて捉えている。

だが、反応はかなり微弱で、いつ死んでもおかしくない危険域だ。

私はインカムから医療班に指示をとばす。

黒羽の方は、私ではこれ以上どうする事も出来ない。

あとは一夏の方だ。

見たところ外傷は無いようだが安心はできない。
私はすぐに一夏の縄を切り、一夏の様子を見る。

「おい一夏！大丈夫か！？怪我はないか！？」

「ち．．．．．ふゆ．．．．．ねえ．．．．．」

「

良かった．．．．．
意識はしっかりある。

「そつだ私だ。お前の姉の千冬だ。怪我はな——」

「あ．．．ああ．．．．．千冬、姉．．．俺が．．．俺が、黒
羽を．．．．．こ、殺したんだ．．．．．」

だが一夏は突如頭を抱えだし呻き声をあげ出した。
マズイ！精神が崩れかかっている！！

「一夏！しっかりしろ！！」

「あゝあああああゝあああゝあああああゝあゝあああああゝ
あゝあああゝ．．．．．！！！！！！」

「っ……………」

すぐさま首に手刀を当てて一夏を気絶させる。

あのまま精神の崩壊が進めば自我が壊れて命の危険に及んでいただろう。

今まで一緒に過ごしてきた黒羽が目の前で瀕死の重傷を負ったのだ。おそらく自分を守るために。

心に多大な傷を残していたとしても何ら不思議じゃない。

そして、その後に来た医療班達に黒羽と一夏を頼み、私は1人、この惨劇の舞台で立ち尽くしていた。

「……………クソッ!!」

私は自分の不甲斐なさを近くにあった柱に殴りつける。

柱はいとも簡単にその原型を保てなくなり飴細工のように曲がった。だが、私が欲しいのはこんな力じゃない…………

「……………世界最強?……………ブリュンヒルデだど?

馬鹿馬鹿しい……………

大切な家族2人も守れなくてなにが世界最強だ……………っ!
!」

私は強くなりたかった……………
家族を守るために強くなりたかった……………

そして世界最強になったと思えばこのザマだっ．．．
黒羽は瀕死の重傷を負い、一夏は心に多大な傷を残した。
結局．．．私は何1つ強くなってなどいない．．．
周りが見えていなかった、ただの愚かな小娘だった．．．
「．．．．．私は．．．．．こんなにも無力だ．
．．．．．」

家族を守る力が欲しい．．．
あの黒羽のように、大切な人を守る力が欲しい．．．
私の呟き誰にも聞こえる事なく、孤独に辺りに響き、まるで私自身の罪状のように静かに木霊した。

黒羽 side

—— 誰かの泣いている声がする．．．
暗い、暗い．．．僅かな光すら差し込まない暗黒の世界で。
悲痛な泣き声だけが響く．．．

「どこだ．．．どこにいるんだ．．．
いったいどうしたんだ．．．？」

呼びかけてみるが、返事は返ってくる事はなく泣き声だけが響く。

なんとか手探りで探してみるが、気付いたら俺の手の感覚は無くなっていた。

歩いて探そうとしたら足の感覚までも無くなっていた。

自分の体を見てみれば、俺の体は何1つ無くなり消えていた。

それなのに意識だけはハッキリとしている。

上下左右のない空間に浮いている感覚がヒドく気持ち悪い・・・

•

「……ったく、一体なんだってんだよこの世界は……」

どれだけそうしていたのか・・・

一分か？それとも一日か？はたまた一ヶ月か？

どうやらこの世界は時間もあやふやらしい・・・

それなのに泣き声だけは鳴り止むことなく、この世界に響く。

遣る瀬無い気持ち溜まり、段々とイライラしてきた・・・

「ん、なんだ？ 光か？」

だが、俺の目の前にイキナリ光が生まれた。

光は暗黒の世界に次々と亀裂を入れていき、やがてガラスが割れたような音を響かせて暗黒の世界を書き換えた。

「は……う……う……」

新しく出来た世界は俺の見覚えある世界だった。

俺はつい最近までここにいた。

この世界は一夏が監禁されてた場所だ。

そして気が付けば泣き声は俺のすぐそばで聞こえてた。

それに、消えていた体もちゃんとある。

俺は泣き声の方に視線を向けてみると．．．

「一夏．．．．．それに俺か．．．．．」

やっぱりと言うべきか．．．

俺の視線の先には血まみれ状態の俺と、泣き崩れている一夏の姿があった。

「おいおい．．．．．なに泣いてんだよ一夏．．．．．
折角の男前が台無しじゃねーか．．．．．」

ここは泣くんじゃなく喜ぶところだぜ。

お前は助かったんだからよ。だから笑いな。

もしかして俺のために泣いてんのか？

俺なんかのために涙を流しちゃいけねえ．．．

こんな狂人に涙を流すなんざ勿体無さ過ぎる．．．

「にしても俺はすげえボロボロだな．．．．．
これ死ぬんじゃないか？」

自分の事になると途端に軽くなる。

よくもまあ見事な絵に描いたようなボロボロ具合。

あの女の撃った弾は榴弾タイプか．．．

爆発して飛び散った鉄片が体にめり込んでいやがる。

まあ、これが普通の弾だったら一夏にも貫通して死んでいただろうな。

女はそれを分かって撃ったのか知らねーが、俺には幸運だったな。だが血を流し過ぎている。

これは下手したら．．．いや、下手しなくても死ぬな。

人の生死を見分けるのには馴れてんだ。

これは死んだな。

「．．．．．だが．．．大切な人を守れば本望だ．．．．．」

最後は一夏に拒絶されちまったがな．．．．．
だけどそれも当然だ。

俺の本質なんて所詮はただの人殺し。

拒絶されても仕方ねえ．．．寧ろ人として真つ当な反応だ。

それでも俺には守りたい大切な人である事には変わらない。

もう．．．俺には悔いはねえ．．．．．

「——おっと、そうはイカの時時計」

「ッ!？」

俺の後ろで突如女性の声が聞こえた。
いつの間に俺の死角に入ったんだ？
ってか、イカの金時計って古っ！！もうそれ死語じゃねえか！！
こ。亀のマンガ以外聞いた事ねえぞ．．．．．

「ハロハロ」一応初めましてだね、黒羽」

あんな前時代的なセリフを言った女が誰なのか確かめるために後ろを振り返ってみると、まるで真夜中を思わせ、光すら飲み込むような漆黒の髪と、絶世の美女と言っても過言ではない圧倒的な美貌を持つ女性が、お気楽な声を出してヒラヒラと手を振っていた。

「．．．．．あんだ．．．誰だ．．．．．？」

「あたしかい？あたしの名前は■だ。ほら、あんだの■■の■」

．．．．．なんだ？

所々話しの内容が途切れて聞こえない。
まるで音声が濁っているような感じがした。

「すまねえ。要所の部分が何言ってるかさっぱり分からねえ」

「あ、そうか．．．．．

黒羽はまだあたしを知らないんだっ たね。

OK。さっきの事は忘れて。

そのうち会う事になると思うけどさ、それまでは待ってておくれ。
会った時にあたしが誰だか分かるはずだから」

「分かった。あんたの事はひとまず置いておこう」

「サンキュー」

なんとまあ随分と軽いノリで．．．．．
見た目は20代前半の絶世の美女なんだが．．
言動が意外と幼いな．．．．．
見た目が見た目だからより一層そう思う。

「で、あんまり時間がないから単刀直入に言うけどさ、黒羽はまだ
死なないよ」

「ん？どういう事だ？」

「黒羽を死なせたくない人が居るって事さ。

真鴉 黒羽の人生はここで終わりじゃないんだよ」

俺を死なせたくない、か．．．．．
随分とその人は変わり者のことで．．．．．

「あ、黒羽いま変なこと考えているでしょ？」

む、考えていることを読まれたか．．．．．

「黒羽が死んだら悲しむ人がいるんだから。
もつと自分の命を大切にしなければダメなんだぞ」

「．．．耳が痛いお言葉で．．．．．」

「ふう、全く黒羽は．．．．．
つと、もう時間みたいだね」

「お？」

気が付けば俺の体は虫食いにあつたみたいに所々消えていた。
成る程．．．もう少しで目覚めるのか。
てか、俺が言っただが虫食いつて表現、なんか嫌だな。

「そんじゃまたね、黒羽。
言い忘れていたんだけど寝起きはスツゴイ地獄だから。
覚悟しとくんだね」

「ホントに今更だな．．．
まあ、ある程度は想像していたからいいけどよ．．．．．」

「うん♪それでこそ男の子だ♪」

「あ、おい！頭撫でんじゃねえよ！！」

あんたみたな美人に頭撫でられるなんて、恥ずかしくて堪ったもんじゃねえ！！

つてか本当に美人だな．．．．．
笑顔がこれほど似合ってる人なんてそうはいない。

それに意外とデカイな．．．

なにがつて？それは．．．その．．．．．む、胸がだな．．．
．．．

つてなに变なこと考えていやがる！！

「あははゝ。なんだい？照れてんのかい？
可愛い所もあるんじゃないかい黒羽」

「ほつとけ！！」

そんなやり取りをやっている間に俺の体はどんどん消えていく。
気が付けば肩より下はもう完全に消えていた。

「さてと、これで暫らくお別れだね。
じゃあね黒羽。またいつか会おうね」

「おう、名前も知らない美人さん」

「あはは、嬉しいこと言ってくれるじゃないか」

くそ．．．お返しに照れさせようとしたら平然と返してきやがった．
．．．．．
そればかりか言った俺の方が恥ずかしい．．．
ちくしょうめ．．．完全に誤爆した．．．．．

「——またね。あたしの相棒．．．．．」

「え？いまなんて——」

女性が言った言葉が聞き取れず、聞き返そうとした瞬間に俺の意識はブツンと途切れた．．．．．
あの言葉は濁って聞こえなかった言葉の１つに違いない．．．
俺にはそう思えてならなかった．．．．．

~~~~~

「ん．．．．．ここはツ——痛つうううう．．．．．  
！！！」

目を開けた瞬間、俺に訪れた感覚は寢覚めの感覚ではなく、想像を絶する痛みだった。

「ま．．．マジ痛えええ．．．．．しかも全身から．．．．．  
．．．．．」

あまりの痛さに大声で叫ぶことすら出来なかった。

女の人が寝起きは地獄って言ってたからある程度は想定していたが、  
これは想定外すぎるぜ．．．．．

「——真鴉さん。体温測りま．．．．．」

俺が想像を絶する痛みに悶えていた時、看護婦さんがやってきた。  
ただ看護婦さんは俺を見るなり動きを止めた。

俺なんか変なことしたか？

「．．．．．や、やあ？」

何故か疑問文で聞いてしまった．．．！

「せ、先生！真鴉さんが．．．真鴉さんが目を覚めました！！」

看護婦さんはまるで幽霊を見たような慌てぶりで部屋から飛び出していった。

全く失敬な．．．．．

俺は自分の体の具合を確かめるために、全身からくる痛みを堪えな

がら両腕を天井にのば．．．．．す．．．．．

「左腕が．．．．．ない．．．．．」

天井にのびた腕は右腕の一本だけ。

左腕を見てみると、俺の左腕は肩から先が無くなっていた。

「それに．．．右目も．．．．．か．．．．．」

右目に幾ら力を入れても右の目蓋は開く事が無かった．．．．．

それに右目の感覚がひどくカラッポだ．．．

これは確実に俺の眼球は無いな．．．あの榴弾の鉄片を受けて潰れたか．．．．．

「．．．．．ふう．．．．．」

俺は深い溜め息を吐いて目を閉じる。

体の一部分が無くなったのは別にいい．．．．．

それ以上に俺の心を占めているのはアノ一言だ．．．．．

『——く、くるな——!』

「っ．．．．．!」

くそ．．．震えが止まらねえ．．．．．  
拒絶されるのは馴れているはずだ．．．．．  
なのに．．．なのになんで俺はこんなにも怯えている．．．．．

「ああ．．．．．そうか．．．そうだったのか．．．．．  
俺は――」

あそこは俺の居場所なんだ．．．．．  
前の世界では俺の居場所なんて何所にもありはしなかった。  
だから拒絶されても大丈夫だった。また別の場所に行けばいいだけ  
なんだから。

それを“馴れている”と俺は勘違いしていた．．．．．  
だけど、この世界で俺は初めて自分の居場所を見つけた．．．  
だから．．．拒絶されるのが怖い．．．．．  
この居場所を失うのが堪らなく怖い．．．．．  
俺が初めて見つけた．．．どこにでもある、ありふれた日常を．．．  
皆んなと笑いあえるこの世界を．．．．．

「．．．怖えよ．．．．．拒絶されるのが怖え．．．．．  
っ」

俺はベッドに包まり、ただ怯えてガタガタと震えてる事しかできな  
かった．．．．．

## 千冬side

あの忌まわしい事件から一ヶ月の時が経った．．．

結局あの事件は詳しく報道されず、私が世界大会を突如棄権したとしか報道されなかった。

そして私はあの日を境にISに乗る事をやめた．．．

それでいい．．．私にとってISは過ちであり、後悔であり、そして罪だ．．．

“力”をただの“暴力”と履き違えていた愚かな小娘の大罪だ．．．

ISに乗る事をやめたのはこれ以上罪を重ねない為の私なりのケジメだ。

あのあと黒羽と一夏は病院に運ばれ、黒羽はなんとか一命を取り留めた。

医者曰く、生きていたのは奇跡に近いです。だそうだ。

だが、その奇跡の代償は大きく、左腕、そして右目を失った。

そして今も意識不明の状態で、

医者は、もう一度奇跡が起こらない限り目を覚ます事は無いでしょう．．．

う．．．、と言っていた。

それでも私は毎日欠かさず見舞いにいつている。

そして一夏も酷かった。

体は全くの無傷だったが、心には致死量の傷を負っていた．．．

最初の頃は鎮静剤を打ち込まなければいけないほど酷く、私が側にいても收拾がつかない事もあった。

黒羽が生きていると聞いた時から大分精神も落ち着き、自宅療養が許されるまで回復してきた。

だが私は知っている．．．一夏は毎夜ベッドで泣き、ろくに眠れて

いない事を．．．．．

一夏が泣いている姿を見る度に．．．黒羽の見舞いに行く度に．．．私は自分の無力さと愚かさを痛感する．．．．．だが、私は逃げない。目を逸らさない。

これらは全て私が招いた罪だ。逃げる事は絶対に許されない。これが私にできる唯一に罪滅ぼしなのだから．．．．．

「——千冬姉、ご飯できたぞ」

自己嫌悪に陥っていた思考を一夏が引き戻す。

もうそんな時間になっていたのか．．．

随分と長く考え込んでいたらしい．．．．．

「ああ、分かった」

そういえば家事は全て一夏に任せっきりだったな．．．．．

私は年長者だというのに、それらしい事は何一つ出来ていない．．．

．．．

それに、いつもはここに黒羽がいて楽しい食卓だった筈なのに——

「千冬姉、なんか顔色悪いぞ？大丈夫か？」

いけない．．．

また自己嫌悪に陥ってしまった．．．

「あ、ああ．．．大丈夫だ．．．」

「本当か？あんまり無理するなよ？」

「お前こそ無理するなよ」

「なに言ってるんだよ千冬姉。俺はもう大丈夫に決まってるだろう」

嘘をつけ．．．

そんな貼り付けたような笑顔で納得する方が無理だ．．．

私に氣を使いおって．．．

お前の方がよっぽど無理しているではないか。

——プルルル、プルルル．．．

突如電話の着信音が鳴り響いた。

相手は．．．病院からだ．．．？

まさか黒羽になにかあったのかっ！？

「はい、織斑です！なにかあったんですか！？」

「織斑さん！ありましたよ！おおありです！！」

真鴉さんが目を覚ましたんです！！」

待て．．．今なんと言った．．．．．？

黒羽が．．．黒羽が目を．．．．．覚ました．．．だと？

「黒羽が！？それは本当ですか！？」

「はい、本当です！！二度目の奇跡が起こりました！！  
本人たつての希望で面会を望んでおります。  
すぐにでもお越し下さい」

「分かりました！では！」

私はもの凄い勢いで受話器を置く。その時に受話器が壊れてしまった  
つが関係ない！

黒羽が．．．黒羽が目を覚ました！！

「おい一夏！すぐに病院に行くぞ！！

黒羽が目を覚ました！！」

「ほ．．．本当か！？黒羽が目を覚めたのか！？」

「ああ本当だ！今から面会に向かう、すぐに準備しろ！！」

「お、おう！！」

一夏の顔がようやく喜びの表情となった。  
あんなハリボテのやつなんかじゃない．．．本当に心の底から笑った。

私もすぐにスーツを着て準備をし、一夏と一緒に病院へと向かった。

## 黒羽 side

一夏と千冬さんが面会に来る。

目を覚ました後、俺は医者から軽い健康診断を受けて、面会しても問題ないと言われてすぐに2人の面会を希望した。

それを受けた2人はいの一番に向かってきているらしい。

すぐに来てくれる2人を俺は半分嬉しく思い、もう半分は怖くなっていた。

（もしまた拒絶されたらどうする．．．．．）

頭の中で悪いイメージが浮かんでくる。

それを頭を振るって追い払い大丈夫だと自分に言い聞かせる。

（大丈夫だ．．．2人はすぐ面会に来てくれるじゃないか．．．．．）

大丈夫．．．俺を拒絶していたらそもそも面会なんかに来たりしない．．．．．）

——コンッコンッ

突如ドアからノックが聞こえた。

——来た！！

「・・・どうぞ」

俺は軽く深呼吸をして気分を落ち着かせる。  
そしてノックの主に入ってくるよう促す。

「・・・失礼する」

「・・・」

千冬さんは一言いって入室し、一夏は一言も発せず無言のまま入ってきた。

「やあ、千冬さんと一夏。

俺からしたらほぼ先日振りだけど、2人からしたら一ヶ月振りかな？」

俺は心の動揺を探られないように、おどけて挨拶する。  
千冬さんはそれを見て一瞬目付きを鋭くした。

やっぱ千冬さんには暴露<sup>ばうろ</sup>たか．．．  
一夏は俺の左腕と右目に着けてある眼帯を見て表情を苦しげなもの  
に変えた。

「さて、私は一度先生の所に行ってくる。  
それまで2人で話しをしている。  
色々と積もる話もあるだろうからな」

千冬さんは俺達の雰囲気を感じ取ったのか、最もらしい言い訳をし  
て一度退室する。  
本当に千冬さんは出来た人だぜ．．．

「．．．．．」  
「．．．．．」

だけど後に残ったのは重苦しい沈黙だけ。  
俺は一夏に一体なにを言えいいのか分からない．．．  
おそらく一夏もそうだろう．．．  
だが、ここで逃げてちゃ何も始まらない．．．  
まずは会話だけでもしないと．．．

「．．．．．一夏．．．．．その．．．俺  
「済まなかった!」は．．．」

俺が喋った瞬間、一夏が頭を下げてきた。

「黒羽にずっと言いたかったんだ．．．．．  
あんな酷いこと言ってごめん．．．。」

黒羽を怖がってごめん．．．。

俺を守るために左腕と右目を犠牲にしてごめん．．．。  
そして．．．俺を守ってくれてありがとう．．．っ」

一夏はそれから涙を流しながら「ごめん、ごめん」と何度も謝った。

バカヤロウが．．．．．お前が謝る必要なんてどこにも無いじやねえか．．．．．

全く．．．とんだ大バカヤロウだぜ．．．．．

「一夏．．．．．」

俺は一夏の頭の上に手を置き、確かめるように頭を撫でた。  
そして――

「ふんっ！！」

――殴った。それも思いつきり。

頭からゴンツと鈍い音が響きとても痛そうなお音だった。

「いつてええええええ！！  
なにしやがる黒羽！！！」

「バーカ、男がメソメソ泣いてんじゃねえよ。

男が泣く時は女房に浮気がバレて許してもらった時だけだ。  
せつかく助かったんだから笑いやがれ。

「じゃねえと殴るぞ」

「もう殴ってるじゃねえか！！」

それに・・・俺のせいで黒羽は左腕と右目を・・・」

「お前が負い目を感じる必要なんざねえんだよ。

寧ろ男にそんなこと思われるとか気持ち悪い。

お前が負い目を感じていいのは俺がお前守って死んだ時だけだ。  
それでも殴るけどな」

「結局殴るんじゃねえか！！」

そんな事を言い合い、最後は看護婦さんに注意されるまで俺達はギ  
ヤアギヤアと騒いでいた。

「さてと、そろそろ千冬さんも戻ってきたころだろう・・・  
ほら一夏、お前は退室しろ。シッシッ」

「俺は犬かよ・・・退院したら覚えておけよ・・・」

「ごめん、忘れた」

「そうかよ。じゃあな」

最後まで軽口を言い合って俺達の会話は終わった。  
その途中――

「なあ、黒羽．．．．．」

「なんだ？ナースの更衣室は部屋を出て右から3番目の部屋だぞ」

「違いよ！！全くお前は．．．．．  
その．．．ありがとうな」

「それは俺のセリフだってーの」

そう言つて一夏は部屋を出た。  
それから入れ替わるように千冬さんが入ってきた。

「話しは終わったか？」

「ええ、千冬さんのお陰で。ありがとうございます」

「なに、気にするな。その様子だと一夏と和解したようだな」

やっぱ千冬さんには見抜かれていたか．．．．．

この人に隠し事はできんな・・・

「千冬さんも聞いたんでしょ？俺の事・・・」

「ああ、一夏から大体の事はな」

「怖くないんですか？俺は人殺しですよ。

それもどうしようも無いくらいの・・・」

「それがどうした」

俺の言葉に、千冬さんは全く歯牙にも掛けない様子だった。

「お前が何者であろうと、命を賭して一夏を守ったお前を否定しない。

私にとって、お前も一夏も大切な家族なのだから」

——家族。千冬さんはいま俺の事を家族と言ってくれた・・・。  
こんな「ろくでなし」を家族と呼んでくれるなんて・・・。  
俺の胸がじんわりと温かくなってきやがった。

「千冬さん・・・ありがとう・・・ごじます・・・」

くそ・・・涙が止まらねえ・・・

それどころかどんどん増えてきやがる . . .

「泣けばいい。今は私の胸で存分に泣け。」

お前の強い所も . . . 弱い所も . . . 私は全て肯定しよう . . .  
「」

千冬さんは優しく俺のことを抱きしめ、ゆつくりと . . . 静かに . . .  
. 慈しみの籠った言葉で語りかけてくれる . . .

「う . . . うああああ . . . . . っ  
怖かった . . . . 拒まれるのが堪らなく怖かった . . .  
. っ

ここは俺の大切な居場所なんだ . . . .  
だから . . . だから . . . . 俺は . . . . っ  
「」

「そうか . . . . 大丈夫だ . . . .  
お前の居場所はここにある。お前の帰る場所はここにある。  
だから安心しろ . . . 私が全てを受け入れよう . . . .」

千冬さんは俺の背中を何度もさすり、俺は千冬さんの胸で思っ存分  
泣いた。

ああ . . . 人ってこんなにも温かいのか . . . .  
俺は人の温かさを知りながら暫らく泣き続けた . . . .

~~~~~

「
／／／」

で、暫らく泣き続けたんだが、少し落ち着いた瞬間に、俺は千冬さんに抱きしめられてた事を思い出して顔を真っ赤にした。
千冬さん aussi 思い出したのか、顔を真っ赤にさせている。

やべえ．．．もの凄く恥ずかしい．．．／／
俺．．．千冬さんに抱きしめられて．．．
そして頭はその．．．千冬さんの胸に．．．や．．．やわ．
．．．やわらか——ええい！煩惱！！

「な．．．なあ黒羽．．．」

「は、はい！」

ヤバ．．．声裏返った．．．

「その．．．この事はお互いの秘密しよう．．．」

「そ．．．そうですね．．．そうしましょう．．．」

これはお互いのために秘密にしておこう．．．
本当は世の男性に自慢したいが、俺のガラスのハートが木っ端微塵に粉碎されるのがオチだ．．．

「よし．．．それでは私はもう戻る。
安静にしとくんだぞ」

「りよ、了解です。
あ、あと千冬さん」

「ん？なんだ？」

「その．．．あまり自分を責めないで下さいね。
悪いのは千冬さんじゃないんですから．．．」

「．．．気付かれていたか．．．
黒羽に隠し事はできんな．．．」

やっぱりこの人も負い目を感じていたんだよな．．．
千冬さんは他人にも自分にも厳しい人だからな．．．
色々と背負い込んでいるんだろう．．．

「それはお互い様ですよ」

「ふ、そうか、それもそうだな」

千冬さんの表情は幾分か柔らかいものになった。

これで解決した事にはならないが、重荷を減らす事はできただろう。

「ありがとう黒羽．．、それではな」

そう言つて千冬さんは部屋を出ていった。

そして部屋には俺一人だけになってしまった。

だけど俺の心にあるのは孤独じゃない。

優しい温かさが俺の心を満たす。

「良かった．．本当に良かった．．．．っ」

ダメだ．．思い出すとまた涙が流れてくる．．．

涙を流すなんていつ以来だ．．？

とつくに枯れ果てたと思つてたんだがな．．．

まだ俺にも涙があつたなんてな．．．

「ああ．．目が無くなつても涙は流れるんだな．．．」

俺は流れる涙を止める事なく、静かに涙を流し続けた．．．

~~~~~一方その頃~~~~~

(か．．．家族か．．．．．黒羽と私が家族．．．．．悪  
くないな．．．．．  
いや、寧ろいい．．．ああ．．．すごくいい．．．．．)

「どうしたんだ千冬姉？顔が真っ赤だぞ」

「う、うるさい！」

「いつてえええ．．．．．っ！！！」

なんて事がありましたとさ。

帰る場所・・・（後書き）

千冬とのフラグを建築中だぜ！！

そして黒羽が眼帯キアラに！

ラウラと被つちまったが気にしないでくれ！

それに眼帯を着ける目の場所も違うから安心してくれ！！

これで長かったプロローグは終わりだ！！

次回からIS学園に入学するぜ！！

楽しみにしてくれ！！

ヒッハー！！

## 主人公説明（前書き）

本編に入ったので主人公説明を挟みました。

主人公のイラストを書いてみました。

生涯で一番本気で書いてみたので、喜んでいただけたら幸いです。  
ヘタクソですけど．．．．．

## 主人公説明

まがらす  
真鴉 黒羽

本作の主人公

前世・・・というか、別の世界で死んだ男が新しく生を受けた、いわゆる転生者。

神社に捨てられてたのを神主さんに拾われた。

本人は前の世界でも親がいなかったので、捨て子だったと知っても気にしていない。

前世で培ってきた技術もそのまま引き継いでいるので剣術は凄く巧い。というより、もはや人外クラス。

一夏や箒、千冬にも剣を教えてて師匠（千冬の場合は嫌がらせの意味が強い）と仰がれるが、本人はそう呼ばれるのを嫌がる。

その他にも色々とぶっ飛んでいる技能を身につけている。本人曰く「あの世界で生き残っていくには必要だった」と言っている

一人暮らしのお陰で料理の腕はかなりのもの。

美味しいものを食べて喜ぶ顔を見るのが好きで、よく皆んなに料理を作っては振舞っている。

一夏に料理を教えたのも黒羽で、その点でも一夏から師匠と仰がれている。

性格は多少ふざけた所もあるが、面倒見が大変良く、一度面倒みると決めたら最後まで面倒みる。ふざけたり冗談を言ったりするのは場を和ましたり、緊張を解すといった意味合いが強い。時たま意味もなく言ったりもするが・・・

非常に頼りがいがあり、同年代からも兄貴分として慕われている。  
一夏は黒羽のイメージを「お気楽な大樹」と称している。

また、家族や人の繋がりを誰よりも大事に考え、傷付ける者はどんな手段を用いて・・・例えば自分の命を犠牲にしでも殺す。

束を「自分にしか興味がない破綻者」だとするなら、黒羽は「他者にしか興味がない破綻者」だろう。

束が黒羽に興味を持ったのは「自分と同じ位置にしながら真逆の方向を見ている」からなのかもしれない・・・

第二回モンド・グロッソで誘拐された一夏を助けるために左腕と右目を失い、右腕にも多大な傷を負った。

再び剣を握るのに地獄のようなリハビリにも耐え、一年半の歳月を経て剣を握れるまでに回復したが、全盛期のように剣は振れない。

一夏は今でも黒羽の傷を自分の責任だと思っており、その事を黒羽は心配している。

容姿は短い黒髪で、182cmと一夏よりも高く、面倒見のよい性格故が一夏と同じくらいモテる。

だが、他人（主に一夏）に向けられる好意は気つくクセに、自分に向けられる好意には疎い。

それに加えて、自分の体は左腕も右目も無いキズモノだから好意を向ける相手などいない、と思い込み尚更鈍感に磨きがかかっている。

主人公イラスト

> i 3 3 5 9 2 — 4 2 5 5 <

ヘタクソですみません・・・

## 自己紹介（前書き）

肌寒くなってきた季節。

皆さんは如何お過ごしですか？

作者は風邪をこじらせました。頭がぐわんぐわんします・・・

ようやく本編に入りました・・・

色々と思う所があると思いますが楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

## 自己紹介

黒羽 side

あの、モンド・グロツソでの事件から3年の年月が過ぎた。その3年の間に様々な事があつという間に流れていった。

俺はあの事件の後、約一年半もの間病院で過ごし、地獄のようなリハビリに耐えて、何とか剣を握るまでに回復した。

だが右腕の方も相当なダメージを負っていたらしく、3年経った今でも全盛期のように剣を振れない。

全盛期では一気に四回斬撃を放てたんだが、今では半分の二回しか一気に斬撃を放てない。

今の強さは片腕も失ったんで、全盛期のちょうど四分の一って所だろう。

今じゃ千冬さんと戦っても、良くて引き分けにしかならねえ……

そして、一夏がより一層力を求めるようになった。

どうやら俺がこんな事になったのも自分の責任だと思って背負いこんでいやる。

俺は気にしてないって言ってるんだが、一夏はまるで聞きやしねえ。

……

いつか無茶しねえか心配だな……

全く……困った幼馴染だぜ。

あ、あと一夏に惚れていた鈴が国に帰っちまった。

その時は俺がまだ入院していたから見送りの言葉を送る事ができなかった。

あいつとは友達として結構仲良くやっていたんだがなあ．．．  
残念だぜ．．．．．

とまあ、慌ただしくもあり、楽しくもあつた出来事ではあつたんだが．．．

そんな程度の出来事は、今まさに現在進行形で起こっている目の前の出来事に比べれば、新聞のコラム程度でしかない。

「はあ．．．．．なあ黒羽．．．ここだよな．．．．．」

「ああ．．．間違いなくここだ．．．．．」

どこかの超名門校を思わせる立派過ぎる校門。

西洋建築の豪邸を思い浮かべる校舎の外装。

軽く見渡すだけでもその全容をうかがい知る事ができない膨大な広さ。

俺達が目の前にしているこの施設の名は――

『―――――IS学園．．．．．』

世界最強の兵器であるIS。

その兵器の搭乗者を鍛え、育成する唯一の教育機関。IS学園。

勿論、ここに入っているのは関係者のみ。

では何故俺達がここに居るのか。...

答えは至極単純明快。俺達も関係者...というか、女性にしか反応しないISを俺達が動かしてしまったからだ。

時を遡ること2ヶ月前... ..

俺達も中学3年生になり、99%以上の中学生が否応なく経験する受験シーズンに身を投じていた時、俺達は私立藍越学園の試験会場である公共施設に行ったんだが... ..

——迷った。それも思いつきり。かつてない程に。

俺が着いていながら全く情けない... ..

ここで来た道を引き返せば俺達の人生もまた変わっていたのかもしれないが、受験勉強でオカシクなった一夏が暴走し、「次に見つけたドアを開けるぞ！それだいたい正解なんだ！...見える！俺にもドアが見えるぞおお！！」って言うって突っ走っていきやがった

んだ．．．．

やっぱアレか．．．．俺と千冬さんがやった『ドキドキ夏文武両道計画！一夏を合格させるんDEATH！』が、相当キツかったんだろうな．．．．  
少し反省．．．．

と、話しがズレちゃったな。すまんすまん。

そして一夏は見つけたドアに何の躊躇いもなく入ったんだが、そこは監越ではなくIS学園の試験会場だった。

当然、IS学園の試験だからISは当たり前前に置いてある。

よく分からない物ほど触りたくなるのは男の子の性。

動く筈ないと分かっているが俺達はISに触ったのだが．．．

．．

——動いちゃった。

女性にしか反応しない筈のISが、何故か俺達に反応した。

それから試験官に見つかり、すぐさま試験に移り、連日テレビで報道され、世界各国から検査の嬉しいお誘いがあり、そいつ等の手から逃れるためにIS学園に入学。ってな感じでトントン拍子に事が進み、俺達はIS学園にいるって訳だ。

これで回想終わり。そろそろ話しに戻ろうか。

「黒羽．．．俺達のクラスってどこだっけ．．．？」

「クラスか？．．．ちょっと待ってる．．．．．ああ、あった。  
あった。」

ええと．．．一年一組だつてよ」

俺はカバンに手を突っ込んで所属クラスが載ってあるプリントを引っ張り出す。

一年一組か．．．．．一夏と“一”繋がりで良い感じじゃねえか。

「さつてと．．．．．んじゃま行きますか。  
入学初日から遅刻とか色々とマズイだろ」

「なあ黒羽．．．本当に行くのか？」

一夏の奴まだ渋っていやがるのか．．．

まあ、無理もないがな．．．．．

今までの日常からいきなり非日常に放り出され。

しかもそれが、ある意味俺達三人のトラウマであるISだもんな．．

．  
渋るのも仕方ないっか．．．．．

「お前の気持ちも分からんでもないが、ここが今の俺達にとって一番安全な場所なんだよ。」

実際問題、俺達は世界中のお尋ね者であり、研究者達が喉から手が出るほど欲しがっている実験動物だ。モルモット

相手は世界。たかだか高校生のガキが戦うのは些かデカすぎる」

「で．．．でもよ．．．．．」

「だから俺達はこの三年間で強くなる。心も体もな。権威や権力、権勢にも屈しない力を手に入れる。」

少なくとも俺はそうするぜ。

お前は どうするんだ？ ．．． ．．． 織斑 一夏

俺は敢えて一夏を“織斑 一夏”と呼び、問いかける。

ISの開発で世界は変わった。しかも劇的にだ。

そして、俺達の出現で世界はまた大きく変わろうとしている。

その時に必ず世界は動乱し、混乱し、うねり狂う。

その真っ只中に俺達は立たされるだろう。もちろん一夏もだ。

ならば、俺達は自分の立ち位置を自分で決めなきゃいけない。

他の誰でもない、自分自身の意志でだ。

このIS学園での三年間で俺達は強くなり確固たり立ち位置を築く。まだ早いと思うが、今ここで聞かなくちゃならねえ。

—— “織斑 一夏”の意志を。

「．．．．．分かった。」

俺もこの三年間で強くなる。

黒羽の言う“強さ”ってのはまだ俺には分からないけどさ。

この三年間でその“強さ”も理解して、必ず俺も強くなるよ」

ほお．．．．．いい面構えじゃねえか．．．．．

それに俺の言った“強さ”をただの腕つぶしだと勘違いもしてねえ。まあ、“強さ”の意味をただの腕つぶしの“強さ”だと思っていたら殴っていたがな．．．

一夏も随分と成長したじゃねえか．．．．．  
真っ直ぐと強い意志の込めった眼で俺を見てきやがった。

「よし、それでこそ俺の幼馴染だぜ。」

んじゃあ早くいくぞ。

これ以上のんびりしてたらマジで遅れちまう」

「ああ、行こう」

そして俺達はデッカイ校門をくぐり、広大な敷地を抜け、豪華な校舎の中へと入っていった．．．

それぞれに誓った想いを胸に刻んで．．．．．

~~~~~

で．．．俺達は早速一年一組の教室に行ったのだが．．．

（お．．．．．重い．．．．．っ！！）

教室の空気が異様に重い．．．

いや、“俺達の”と言った方がいいか．．．
それもそのはず。だってこの教室には――

――女子しかいねんだから．．．

いや、分かってはいたんだがなあ．．．

これは予想以上にツライぜ．．．

なんたつて俺達はこのIS学園では絶滅種とも捉えられる“男”だからな。

そしてその男の1人である一夏はイケメンの分類に入るほど格好いい。

それに物珍しさと相成って一夏には女子の熱い視線が送られているま、俺のナリはこんなだから一夏のような視線は送られねえだろう。（注意！！ 本人は全く分かっていません！！）

今はS H Rの時間だが、ここは慣れるしかねえだろう。

一夏。俺も頑張るからお前も頑張るんだぞ。

「——はいつ。私はこのクラスの副担任、山田 真耶です」

目の前で女性特有の丸い可愛い文字を黒板に書くのは副担任の山田先生。

生徒達とそう変わらない体型、サイズが合っていない服、ずれたメガネ。

なんつーか・・・その姿は「背伸びをした子供」をイメージさせる。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「はい」

『・・』

って俺だけかよ！？

皆んなもうちよつと反応しようぜ

ああもう！山田先生、そんな目をキラキラさせて俺を見てくださいー！！

「えっと、じゃあ最初のSHRは皆さんに自己紹介してもらいましょう」

そして始まる自己紹介。

あいっえお順からどんどんと進んでいき、やがて「お」の織斑になった。

だが一夏は．．．．．ありやダメだな．．．．．
女子の視線による機銃掃射で八チの巣状態。机に突っ伏していやがる。

「織斑くん、織斑くん、．．．．．織斑 一夏くん」

「はっ、はいっ」

見かねた山田先生が一夏の目の前にでる。
ようやく反応した一夏だったが驚いたのか、イスから大きな音をたてて立ち上がる。
そのせいで山田先生がすこし怯えちゃった。

「お、大声出しちゃってごめんなさい。
怒ってる？起こってるかな？

ゴメンね、ゴメンね！

でもね、あのね、自己紹介って「あ」から始まって、今「お」の織斑くんなんだよね」

「つか山田先生怯えすぎだなあ．．．
あそこまで怯えられると、こっちの方も申し訳ない気持ちになってくる。」

「いや、あの、そんなに謝らなくても．．．
しますから、自己紹介しますから」

「ほ．．．本当ですか？ウソじゃありませんよね？ウソだったら先生泣いちゃいますよ？」

すでに涙声、涙目の状態でそんなこと言われてもなあ．．．
とりあえずは2人とも落ち着き、一夏は自己紹介するため皆んなの方に向き直る。

緊張しまくってすげえガチガチだな．．．
頑張れ頑張れ～～～

「えー．．．えっと、織斑 一夏です。
よろしく願います」

おいおいおい、たったそんだけか？
女子は「それだけ？」とか「他にないの？」っていう視線を飛ばしてきてるぞ。

ほら、どうすんだ一夏？

「その．．．．．以上ですっ」

『ガタツ！！！』

ま、そんな事を期待するだけ無駄か。

いや、ある意味では期待通りと言った方がいいのか？

それにしてもこのクラスはノリがいいなあ

机からズリ落ちて．．．まるで昔のお笑い番組みたいな反応だな。

．．．．．おや？なにやら見慣れた人が．．．．．

「挨拶もまともにできないのか馬鹿者」

これはこれは．．．．．なんと言うべきか．．．．．
黒でピシッと決めた千冬さんが現れた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

さっきのオドオドとしていた態度は何所へやら．．．
今は熱っぽい視線へとシフトチェンジしている山田先生。

「ああ山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

対する千冬さんも山田先生の質問に平然と答える。

あらら．．．一夏の奴 固まっちゃった．．．

「諸君。私がこのクラスの担任を務める織斑 千冬だ。

君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。

出来ない者には出来るまで指導してやる。

逆らってもいいが私の言う事は聞け。いいな」

そして、固まった一夏を華麗にスルーして、千冬さんは毅然とした表情で生徒に言い放つ。

「．．．．．き．．．．．」

き．．．．．？

「キャーーーー！！！！」

千冬様よ！本物の千冬様よ！！」

うおっ！？

なんだなんだ！？いきなり大声出しやがって！？

一瞬だが教室が揺れたぞ！？

「ずっとファンでした！！」

「お姉様に憧れてこの学園に来たんです!!」

「私、お姉様のためなら死ねます!!」

「お姉様のペットになりたいです!!」

これはアレか？

現役時代の千冬さんのファンってやつか？

まあ、あんなにカッコ良く戦っていた千冬さんに憧れるのも分からなくはないが・・・

一番下の奴!!お前は一体何を言い出すんだ!?

「全く・・・毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。それとも何か？私のクラスにだけ集中させているのか？」

あゝあ・・・あの表情はマジで鬱陶しいて思っている表情だ。人気が高いのも考え物ですね。千冬さん。

「きやあああああつ!!」

お姉様!もつと叱って!罵って!!」

「でも時には優しくして!」

「そしてつけあがらないように躑をして!」

「く・・・首輪を・・・（ハアハア）」

おおい！！こいつ首輪を持参してきてるぞ！！
なんかもう怖えよ！誰かつまみ出せよ！！

「——ち．．．千冬姉．．．．．なんで．．．．．」

ようやく思考の伝達回路が修復したのか、一夏が声をかける。
だがなあ一夏．．．千冬さんは公私の区別をくつきりと分ける人なのは お前もよく知ってるだろ．．．．．
そんな家にいる時みたいな口調で話せば．．．．．

「学校では織斑先生と呼べ。馬鹿者」

——パァン！！

ほらな、叩かれた。

「．．．．．はい、織斑先生．．．．．」

一夏も分かったらしく、頭を押さえながらではあるが頷いた。
てかアレ痛そうだな．．．．．
俺もやられないよう注意しとこ．．．．．
一夏と千冬さんが姉弟なのを知り、クラスの女子が多少ざわついた

が、滞りなく自己紹介は進んでいく。

すこし高飛車な金髪のお嬢さま。

それと．．．お、箒もいたのか！！懐かしいなあ．．．手を振ってやろう．．．．．

「——次。真鴉 黒羽」

おっと、自己紹介も俺の番か。

どれ、不甲斐ない一夏に代わって俺がいつちやるか．．．
心なしか女子の目にも期待の色が見えている。
その期待に応えてやるとするか。

「真鴉 黒羽だ。そこにいる一夏や織斑先生とは子供の頃からの付き合いだ。

趣味は剣術と料理。特技は潜入活動スニッキングや破壊工作サボタージュ、その他諸々etc．

．．
ちなみにこの左腕は世紀末霸王との間に繰り広げた死闘の際に失い、
右目は直死の魔眼なので眼帯で封じている。
皆んなくれぐれも注意してくれ。以上」

「なに真顔でしれっと嘘言っている」

——パシッ

イテテ．．．叩かれちゃった．．．．．
でもあまり痛くない。

一夏の自己紹介のヘマもあつたんで大目にみてくれたんだろう。
女子の方も何人が笑ってくれてる人達もいるしな。

「なんだ？ 特技が潜入活動スニッキングや破壊工作サボタージュつて．．．．．
お前だと出来そうだから妙に説得力がある。
それに世紀末霸王だの直死の魔眼だの．．．
そんな嘘 誰が信じるんだ？」

「えっ！？ 今の嘘だったんですか！？
どこからどこまでが嘘なんですか！？」

千冬さん．．．ここに信じてる人がいますよ．．．．．
てか山田先生．．．言った俺が言うのもアレなんです、こんな嘘
信じちゃダメでしょう．．．．．

「と言う事で黒羽。やり直せ」

マジか．．．一体どこがダメだったんだ？
特技の部分は本当に出来るから問題ないとして．．．．．
やっぱアレか、世紀末や直死の部分がダメだったのか？
うーん．．．．．よし、直死の魔眼は危ないから写輪眼で――
――ってオーケーオーケー！！ 分かった、分かったからその縦にして
振り下ろそうとしている出席簿をしまってくれ千冬さん。
ちゃんと真面目にやりますよ。

「じゃあ、特技の部分は銃弾避けと鉄塊斬りに変更。
左腕と右目は．．．．．まあ事故で失ったようなもんだ。
これから一年間、クラスメイトとして宜しく頼むわ」

『よろしく〜！！』

歓迎の声、賑やかに鳴る拍手。

どうやら女子達には受け入れられたみたいだ。

どうだ一夏。これが——っておいおい．．．

まゝた苦い顔してらあ．．．

アノ事故は自分のせいってか？

全く．．．ズルズルと引きずりやがって．．．．．バカ野郎が．

．．．．．

「よし、これで自己紹介は終わったな。

これでSHRは終わりだ。

諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらっ！！

そのあと実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。

いいか。

いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。

私の言葉には返事をしろ」

まるで軍隊の教官のような言葉を生徒に言い放つ千冬さん。
まあ当たり前だよな。

ISに関わるということは軍隊に関わるということだ。

なんたつて世界のパワーバランスを担っているんだからな。

“力”持つ者にはそれ相応の責任が必要だ。

それを分かっているのか、生徒達も表情を真剣なものにさせる。
安心したぜ．．．これで普通の女子校みたいな軽いノリだったら俺
がブチ切れていたところだ。

そして俺達はIS学園で初めての授業を受けた．．．．

自己紹介（後書き）

全然話が進まない・・・
早くセシリアとの決闘を始めたい・・・

己が罪・・・（前書き）

進まない・・・全然本編が進まない・・・

己が罪・・・

黒羽 side

ハラハラ ワクワクな・・・でもないか・・・
とりあえず、バタバタと慌ただしい自己紹介タイムも終わり、IS
学園で初めての授業を受けた。

丁度 今は一時限目が終わって休み時間だ。

「どうだった一夏？

大丈夫そう・・・じゃないな・・・」

「く・・・黒羽・・・」

一夏はまるで糸が切れた人形のようにグデゥっとなって、机に自分の体を広げる。

まあ無理もないか・・・

ここはIS学園。当然の事ながら授業内容はISの事に関するもの
のだ。

ハッキリ言って授業内容は超難しい。

反重力物理学やらエネルギー流動法則やら・・・どこかの専門大学
・・・いや、大学院レベルの単語や定理がポンポンと湯水のように出
てくる出てくる。

かく言う俺もノートに書くだけで精一杯。

あとで自習をしないといけないな・・・

だが、一夏の状態の原因は なにも授業内容だけじゃない。

「じょ．．．女子の視線が．．．．．」

「やっぱりか．．．．．」

そう、一番の原因は俺たちを見つめる視線。

別に嫌悪といった視線ではない。寧ろ 友好的な視線だ。

だが、その視線も高密度に、長時間も向けられたら流石に辛いものがある。

特に一夏にはそのルックスと千冬さんの弟という情報も加わって視線を集めている。

「——ちょっといいか？」

そんな状況にため息をほこうとした瞬間、突然声をかけられた。俺たちは振り返ってみると．．．．．

「ほ．．．箒か．．．．．？」

一夏が驚きの声をあげる。

やっぱり自己紹介の時なにも聞いていなかったな．．．
声をかけた主は俺たちの幼馴染の篠ノ之 箒だった。

「よお箒。随分と久し振りだな」

「はい、師しよ——ゴホン。
そうだな、黒羽」

お、箒も俺を師匠と呼ぶのをやめたか！
6年の年月で箒もようやく分かってくれた。
逆に師匠と呼ばれたらどうしようか迷っていたとこだ。

「そうかそうか！箒も俺を師匠と呼ぶのをやめたか！偉いぞ箒！！」

「わ、こら！頭を撫でるな！」

おっと、ついクセで頭を撫でてしまった。
箒も年頃な女の子だからな。少し短慮だったな。

「済まん済まん。思わずやってしまった。
箒もそういうお年頃だからな。」

——それに、俺じゃなくて一夏に撫でてほしいんだろ？」

最後の方は箒にしか聞こえないくらいの小声で話す。
俺が頭を撫でた瞬間、僅かだが箒は一夏の方を見ていたからな。
6年の年月を経ても恋は変わらず……か……

青春だねえ」

「な！？・・・ななな、何をバカな事を言っている！？」

俺の言葉を聞いた篤は面白いように顔を真っ赤にして狼狽える。
ははは、そんな大声出すと一夏に気付かれるぞ？

「篤？いきなり大声出してどうしたんだ？」

「気にすんな一夏。篤が少し一夏と話しがしたいんだとよ」

「お、おい黒羽！！」

いきなり2人つきりは緊張するか？

篤はかなり慌てだした。

だがなあ篤・・・もう少し積極的にかねーと、この朴念仁相手じゃ60歳いっても気付かねーぞ？

「まあまあ篤。折角こうして再会したんだ。

これをチャンスに“運命の再会”を印象付けて一夏にポイントを稼いどけ」

「だ・・・だがな・・・・・・私にも心の準備というものが・・・
・・・」

「そんなんでいいのか？よく聞けよ箒。」

このIS学園は俺と一夏を除けば女子しかない。

そして一夏のルックスも良いときた。

お前より積極的な女子が現れれば一夏はあつという間に取られるぞ？

この学園には美少女が多いからな」

俺は先程と同じように小声で箒に語りかける。

すると、箒の顔はみるみると血相を変えていった。

一夏が他の女子と仲良くしている場面を想像したんだろう。

いいねえ〜・・・純情だねえ〜・・・

「・・・一夏・・・ちょっと来てくれ・・・

場所は・・・廊下でいいか？」

お、ようやく決心したか。

箒にしちゃあ上出来じゃねえか。

よし、あとでご褒美として卵焼きを作ってやろう。

「え？別にいいけど・・・って黒羽は？」

このバカ野郎が・・・

なんでこの場面でその言葉が出せんだよ・・・

箒の気持ちを1ミクロンでも理解すればそんな言葉ださねえだろう
が・・・

「俺は後でいいんだよ。
ほら、さっさと行きやがれ」

俺は足で一夏を小突きながら廊下に行けと促す。
箒の気持ちを無駄にする訳にはいけないからな。

「イテテ、分かったから小突くなよ．．．
それじゃあちよつと行ってくる」

渋々といった様子だが一夏は教室を出た。
全く．．．箒が不憫すぎてならないぜ．．．．．

「黒羽．．．その．．．あ、ありがとう」

「ん。気にすんな。これ位どうってことない。
ほら、箒も早く行きな。貴重な時間が減ってくぞ」

「ああ、分かった」

一夏と2人つきりなのが よつぽど嬉しいみたいだな。
箒はまるでルンルンと聞こえそうな足取りで一夏に着いて行った。
恋せよ乙女。頑張れ乙女。
俺は事の成り行きを見守るとするか．．．

「ふう．．．．．さて．．．．．」

突然だがここで問題。

この大量の視線を二分していた一夏が筈と一緒に رفتちまった。
今やこの場に男は俺ただ一人。

となるとこの視線．．．もとい、女子の関心はどうなる？

『ジ〜〜〜．．．．．』

答えは簡単。女子の視線は俺だけに注がれる事になった。

これは落ち着かねえな．．．

このままズルズルと引きずれば女子の視線が止む事はない。

これからのためにも俺がなんとかするしかないか．．．．．

「皆んな。そんなにジロジロと年頃の女の子に見つめられたら俺も
流石に困る。」

丁度今は休み時間だ。

俺に聞きたい事、質問したい事があればドンドン言ってくれ。

時間はそこまで多くはないが、可能な限り答えよう。

皆んなとの親睦を深めさせてくれないか？」

俺はクラス中の女子を見渡して宣言する。

少し芝居がかっていたか？

あまり慣れない事をするもんじゃないな．．．

『
．．．．．
．．．．．』

クラスのみんなは俺の言葉を聞くなりシーンと静まり返った。
だけどそれは悪い方の静けさじゃない。

俺の言葉を頭で再認識しているといった感じだな。

そして、ようやく頭の整理が終わると、目をキラキラと輝かせて
．
．．．．．

「じゃ、じゃあ私から!!」

「あ、ズルい!私が先だよ!!」

まるで雪崩を思わせるような勢いでみんなが俺に殺到した。
てか多すぎだな．．．

これじゃあ話しもまともに聞けねえ．．．．．

「はいはいみんな落ち着いて落ち着いて。」

そんなに一辺に話されちゃあ答えられるもんも答えられねえ。

まずは順番。1人ずつで頼む。

それじゃあ最初は君から」

なだれ込むみんなをまずは落ち着かせて、近くにいた女子から質問

を促す。

思いの外、他の皆んなも分かってくれたようで 不満を言う事はなかった。

皆んな結構 聞き分けのいい子達だな・・・

「それじゃあ私から・・・

真鴉くんの事はなんて呼べばいい？」

「別に真鴉でも黒羽でも構わない。

いつその事 愛称をつけてもいいぞ。

悪意ある愛称以外は許す。気軽に呼んでくれ。
それじゃあ次」

「はいはい私！

さつき篠ノ之さんと話しをしてたけど2人は知り合いなの？」

「筈とは小さい頃からの知り合いだ。

自己紹介の時も言ったが、一夏と織斑先生とも小さい頃からの仲だ。
いわゆる幼馴染ってやつだな」

「つぎ私！

黒羽くんの好きなタイプはなんですか？」

好きなタイプか・・・

やっぱアレか・・・女の子は色恋沙汰に敏感なのか？

「そうだな・・・今まで考えた事もなかった・・・

よし、これから探すとしよう。
質問の答えはそれでいいかな？」

俺の言葉を聞いたみんなは『ボールゾーンなし……』と
言ってメモを書いていた。
一体どうしたんだ？

「それじゃあ私がカーくんに質問するね」

はて……カーくんとな？

「それは俺のことかな？」

「そだよ。真鴉の鴉でカーくんだよ。
あ、私の名前は布仏 本音だよ。
よろしく」

異様に袖丈が長い手で握手をしてきた本音。
その間延びた声と眠たそうにしている雰囲気は のほほん を想
像させる。

「早速愛称で呼ぶか……
いいねえ、こちらこそよろしく。
で、質問するのは？」

「さっき自己紹介で趣味は料理って言ってたでしょ？」
カーくんの作る料理は美味しいの？」

「そうだな．．．．．振る舞ってきた人達には不味いと言われた事はない。

よし、今度皆さんにご馳走しよう。

美味しいと言ってもらえて笑顔になるのが俺が一番好きだからな」

料理は本当に素晴らしい。

相手の事を考えて作らないと美味しくならないし、それを喜んでもらえた時の笑顔はとても嬉しい。

自然と俺の顔からも笑みが零れる．．．．．

『．．．．．
．／／／
』

すると、突然みんなが静かになりだし顔を少し赤らめる。
はて？一体どうしたんだ？

「なあ本音。みんなはどうしたんだ？」

俺は唯一いつも通りの本音に聞いてみる。

「それはね、カーくんがとてもいい笑顔だったからだよ。」
私も少しカッコイイって思っちゃった」

「そうなのか？ありがとう？」

なんかよく分からないが、褒められたらしい。
とりあえずお礼だけは言っておこう。

黒羽は全く知らないが、皆んなに見せた笑顔はとても魅力的な笑顔だった。

着けてある眼帯の刺々しい雰囲気から優しい雰囲気になり、そのギヤップにクラスの皆んなは見惚れしまったのだ。

「あやや、カーくんは朴念仁さんか・・・」

本音がボソツと漏らすが、その小声は黒羽の耳に届く事はなかった。

side out

黒羽がクラスの皆んなから質問されていた同時刻、筈と一夏は教室の喧騒から離れて2人つきりになっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

．．．．．

だが、お互いは一言も喋らず黙したままだった。

箒は意中の人と２人つきりで頭が軽いパニック状態に陥ってしまい何を話せばいいのかわからなくなってしまう、

一夏はただ、呼び出したのは箒だから最初に喋るのも箒だろう。と思案して黙っているだけだった。

この場に黒羽がいたら、「女の子に先に喋らすなんて何を考えていやがる！まずはお前から喋れ！」と、叱喝していただろうが、いない人の事を言ってもどうしようもない．．．

「一夏．．．その、元気だったか．．．．？」

沈黙に耐え切れなくなったのか．．．

はたまたましい人と話す時間が減っていくのを焦ったのか．．．この空間の第一声は箒だった。

「ああ、元気．．．だな。今は．．．．」

一夏も答えようとした瞬間に言い淀んだ。

「元気だったか？」この言葉を聞いて一夏は反射的に過去を思い返してしまった。

その過去を占める大半の記憶が、アノ事件．．．

自分の無力さ故に起こってしまった事件。

自分の心の弱さ故に死に瀕した師であり兄である大親友。

無数のチューブが体に巻きつけられ死んだように眠る光景．．．

．．．
今でもその光景は鮮明に．．．まるで忘れてはならない罪状のように脳裏に焼き付いて離れない。

そして繰り返す後悔と自責の念に駆られる日々。

答えの出ない自問と自答。

やり場の無い怒りと、執拗に求めた力。

まるで抜き身の刀のような雰囲気こそこら中に振り撒き、中学では【狂犬】なんてアダ名も付けられた。

そんな事を約半年前までやっていたのだ。

箒の問いに“今は”を付けるのが一番の正解だと思っただろう。

「つと．．．それより、去年の剣道の全国大会で優勝したんだってな。

おめでとう箒」

だが、それは自身の罪科であって他の人に見せる物ではない。

それを分かっている一夏は咄嗟に話題を転換する。

「なっ．．．なんでそんなこと知ってるんだ!？」

幸いな事に箒には気付かれなかったみたいだ。

いや、思い人の賞賛の言葉に気付けなかったんだろう。

これぞ、恋は盲目・・・少し意味が違うな・・・

「なんでって・・・新聞で見たし・・・」

「なぜ新聞なんか読んでいる!？」

はたから見ればメチャクチャな言葉だろうな・・・
それとも箒は一夏が新聞を読まない奴だと認識してたのだろうか・・・?

「なぜって言われてもなあ・・・」

流石にそんなムチャな質問を答える術を持たない一夏は多少呆れた表情をしながらため息をはいく。

そこからまた最初と同じように沈黙が続いてしまった。
だが、またしてもその沈黙を箒が破った。

「なあ一夏・・・黒羽に何があつたんだ？」

だけどソレは踏んではならない地雷だった。
いや、彼女からしたら どうしても聞かなければいけない事柄だろう。

一夏が黒羽を家族と思っているように、箒にとっても黒羽は大事な家族なのだ。

自分に剣を教えてくれた人で、いつかその背中に並び、そして超えたいと思い、困った時には真摯に相談にのってくれた大事な大事な兄貴分。

その彼に会った時、“嬉しさ”の感情よりも“何故？”の感情が強かった。

右目に着けた眼帯、左肩から先が無い腕。

この6年間で痛々しく変わった彼に一体何があったのか？

その答えは一夏や千冬なら知っているはず。

だからこそ彼女は一夏に問うた。

踏んではならない地雷だと分かりながらも．．．．．

「っ．．．．．あれは．．．．．全部、俺が悪いんだ．．．．．っ」

苦虫を噛み潰したような．．．なんてもんじゃない。

まるで自分の傷を掻き毟って抉るような苦痛の表情を一夏は浮かべる。

「なんでもない」なんて誤魔化しが言えればなんと楽なことか．．．

．．．
ただど一夏は言わない。断じて言わない、言っではいけない。

そう言ってしまったら　きっと彼の心の中にあるナニカが根元から瓦解するだろう。

でも全ては言えない。アノ事は黒羽も関わっているのだ。

自分1人が軽々しく全てを語っではいけない。

だから一夏は全てを肯定するしかなかった。

自分の過ちを．．．自分の罪を．．．．．

——キーンコーンカーンコーン．．．．．

この海の底のような重たい空気が漂うなか、場違いな軽いチャイム音が鳴り響いた。

それを聞いて他の生徒達も次々と自分達の教室に戻っていく。

「そろそろ．．．戻るか．．．．．」

「ああ．．．そうだな．．．．．」

それに少し遅れて一夏たちが歩き出す。

筈は思い人の力になれない自分の不甲斐なさに苛まれ、一夏は自身自身の無力を呪いながら．．．．．

2人はどんよりとした雰囲気を出しながら教室へと向かった．．．

．．．

己が罪・・・（後書き）

長くなりそうだったので一旦区切ります。

字数多くしたいな・・・

でも今書いているネギま！が忙しい・・・

変な電波を受信してゼロの使い魔もストックを貯めてるし・・・

そしてPSSのダークソウルがメツチャムズイ！！

いやぁ・・・一夏が思い詰めてますね・・・

そしてそれを乗り越えて強くなる一夏。

黒羽より主人公っぽいな・・・

開幕の鐘（前書き）

筆が進んだので投稿します。

原作を買いました！！一巻だけですけど・・・

これで支離滅裂な話しは書かない・・・はず・・・

開幕の鐘

黒羽 side

ふう．．．皆んなの質問が終わって今は二時限目だ。

少しは皆んなと仲良くなれて、あの大質量の視線は驚くほど激減した。

だが、教室に戻ってきたアノ２人の雰囲気がムチャクチャ沈んでいやがった．．．．．

一夏の様子から察するに俺の傷絡みだな．．．

はあ．．．なんとか出来んもんかね．．．．．？

「———と云うことで、ISは最初 宇宙進出を目的にして発明されたんですが、当初は一笑に付されました。

ですが、白騎士事件を発端に各国はISを兵器として着目。

今ではアラスカ条約制定によってスポーツのイメージが強いものとなっていますね」

つと、今は授業中だったな．．．

考え事しながら授業内容を覚えるなんて偉業は俺にはできない。

今は授業に集中しねえと．．．．．

「これでISの大まかな成り立ちは終わりです。

早速教科書に移りましょう。

テキストの７ページを開いてください」

最初は簡単な歴史だったんだが、今は超難解な単語や方程式が右へ左へと飛び交う。

かああ！！まだ7ページでなんでこんな難しいんだああ！？

「——それじゃあ　ここまでで分からない人はいますか？」

山田先生の言葉に誰も手を上げない。

まあ、そりゃそうだよな……

皆んな予習ぐら——

「先生……分かりません」

と思いきや手を上げた人物がいた……
つと言つても一夏だがな。

お、少しだが鬱オーラが弱まっている。

「どこが分からないんですか？織斑くん？」

「えーと……正直に言ってもいいですか？」

「どうぞどうぞ遠慮なく！」

なんたつて私は先生なんですから！！」

頼られるのが嬉しいのか、山田先生は先生の部分を強調してエッヘンと胸を張る。

その姿や行動だと先生には見えませんよって言ったら山田先生が泣きそうだから止めておこう。

「その．．．全部です」

「へ？」

次の瞬間、山田先生の自信は一夏の言葉の前に木っ端微塵に砕け散った。

流石が一夏！俺たちに出来ない事を平然とやってのける！！
そこにシビレもしないし憧れない！！

「全部って．．．．．」

「はい。全部です」

山田先生は確認のためにもう一回聞くが、一夏の言葉は変わらない。
と言うか、なに一回目より自信満々で言ってたんだよ．．．

「その．．．．．真鴉くんはどうですか？」

やっぱり一夏がコレだから俺もそうだと思われるわな．．．
つか、なんでオメエは仲間を見るような視線で俺を見るんだよ一夏。

残念ながら俺はオメエとは違うんだよ。

「いえ、大丈夫です。

確かに難しいですが、ノートに書いているので後で自習しますし、それでも分からなかったら先生に聞きますんで」

「そうですか．．．良かったあ．．．．．」

俺の言葉を聞いて、山田先生は安堵の声を漏らす。

「．．．なんでだ．．．．．?」

そして一夏よ．．．．．

お前はなんで裏切られたような視線を俺に向けるんだ?

よし、あとで私刑．．．もとい、鍛錬をしてやろう．．．

この学園には道場もあつたはずだからな。

うし、腕が鳴るぜ．．．．．

「——入学前に参考書を渡しただろう。読まなかったのか?」

すると、突然 千冬さんがやってきた。

参考書というのはIS学園に入るにあたっての、学園規則から始まり、ISに関しての知識がビッシリと網羅している物だ。俺がなんとか頑張っているのも、この参考書によるところが強い。ちなみに参考書は物凄くブ厚い。タウ。ページとなんら遜色ないほどの厚さだった。

「参考書？．．．．．参考書ってなんだ黒羽？」

「ほらアレだ、タウ。ページだ」

「ああアレか！資源ゴミの日に捨てちまった！」

「この馬鹿者！！」

一夏の言葉と同時に振り下ろされる出席簿。

千冬さんの表情は、さながら般若の如くだった。

．．．今さっき思ったんだが、なんであの出席簿は原型を留めていられるんだ？

あんだけスゴイ破壊力を実現しながらヘコんですらないなんて．．．．．

材質が特別なのか？

それとも千冬さんクオリティーなのか？

うん、分からないな．．．．．

「ちゃんと必読と書いてあった筈だ。

あとで再発行してやるから一週間で覚えろ。
いいな？」

「いや、でも千冬ね．．．織斑先生、それは流石に——」

「いいな？」

「．．．．．ハイ。織斑センセイ．．．．．」

疑問文という名の命令に、一夏は従うしかなかった。

一夏の今の心情は、「理不尽」ってところか？

うゝん．．．一夏の気持ちも分からなくはないが、俺達は社会という集団で生きてかなくちゃいけないんだ。

それが、望む望まないに関わらずな。

それが嫌なら仙人が修行僧にでもなるしかねえんだ。

「なあ一夏。

人とは集団の生き物なんだ。

お前は「好きでここに居る訳じゃない」と思ってるかもしれんが、人生なんて理不尽の塊さ。

今の状況をヤダヤダと言っているのは子供だけだ。

どう理不尽な事に出会わないのか．．．ってのも大事だと思うが、今ある理不尽をどう楽しむのか．．．ってのが、俺が一番大事だと思うぜ？」

「黒羽．．．．．」

気付いたら俺は一夏に語りかけていた。

千冬さんに注意されると思ったが、千冬さんは腕を組んで聞きに徹

している。

山田先生やクラスの皆さんも耳を傾けていた。

よし、それならいっその事 最後まで言ってみるか。

「それに、今でこそスポーツという形で落ち着いているが、ISは立派な兵器だ。

正しい知識、運用方法、兵器であるという認識。

それらを理解しなきゃ重大な事故 事件に繋がる。

そうなれば自分自身、或いは大切な人を傷付ける事になっちまう。
お前はそうなってもいいのか？」

「っ!!... ..それは... ..っ」

一夏が思ったのはおそらくアノ事件。

古傷を抉るような真似はしたくないが、一夏に発破をかけるならこれほどピッタリな言葉はない。

「... ..分かった... ..」

織斑先生、あとで参考書を受け取りにいきます。

ちゃんと一週間で覚えますから」

一夏は目に見えてヤル気を出し、その眼には一種の決意の炎が宿っていた。

よし、発破がけは成功したぜ。

「流石だ一夏——」と、授業中の勝手な私語、済みませんでした。
山田先生、織斑先生」

「気にするな。お前が言っていなかったら私が言っていたからな」

「そ、そうですよ！」

それに．．．すこしカッコ良かったですし．．．．．」

ん？山田先生の言葉が最後まで聞き取れなかった。

それに、何故クラスの皆んなまで顔を赤くしてるんだ？

もしかして風邪か？季節の変わり目は体調を崩しやすいからな。保健室に行かなきゃ駄目だぞ？

——ツン、ツン．．．．．

そう思っていると、隣の女子から突つかれた。
はて？なんか言いたい事でもあるのか？

「どうしたんだ？」

「さっきの真鴉くん、カッコ良かったよ。
思わず胸にジーンときちゃった」

「さっき．．．ああ、一夏に言ったアレか。
寧ろ変じゃなかったか？キザ過ぎるだろ」

「そんな事ないよ。」

なんかこう．．．ISが兵器なんだって、改めて実感して、一層気が引き締まったよ。

あ、私の名前は鷹月 静寐。よろしくね、真鴉くん」

俺は否定するが、静寐は賞賛の声をやめない。

なんだかなあ．．．こういうのはこそばゆいな．．．

「真鴉くんを最初見たとき、眼帯着けてて怖そうだなあ、て思ってたけど、休み時間の時やさっきの言葉を聞いて、見た目と全然違うんだなって思った。

なんかこう．．．頼れるお兄さんって感じ？」

お兄さんか．．．

確かに精神年齢では圧倒的に上だからそう見られるか。
体は一応同年齢だから、あまり思われたくないが．．．

「はは、そいつはどうも。」

つと、授業に集中しねえと。

織斑先生に叩かれちまうぞ」

「そ、そうだね．．．

私もアレは勘弁したい．．．」

俺達は話しを区切って授業に集中した。

くそ．．．やっぱ難しい．．．．．
これは徹夜コース決定だな．．．．．

~~~~~

「——ちよつとよろしくって？」

「へ？」

「ん？」

二時限目も終わり、異国の言葉と聞き違うかのような難解語の嵐も過ぎ去ったかと思つたら、突如声をかけられた。

声をかけた相手は、僅かにロールがかつたキレイな金髪が特徴の女子だった。

たしか名前はセシリア・オルコットだったけ．．．

腰に手を当てる俺達を見るその様は、女尊男卑社会が生み出した『いかに』現代の女子だった。

この雰囲気．．．実際は良いところの身分．．．お嬢様なんかじゃないのか？

「訊いてますの？お返事は？」

どうやら素っ頓狂な声を出して返事をした一夏がお気に召さなかつ

たらしく、今や一夏の方に視線を向けている。  
それを見て他のクラスメイトも聞き耳を立てた。  
はあ．．．なんかメンドくさい事になりそ．．．

「あ、ああ。訊いてるけど．．．．．どういう用件だ？」

一夏もこつこつという手合いは苦手だからな。  
返事がつい　ぶっきらぼうになる。  
それを聞いた彼女は　かなりワザとらしく声をあげた。

「まあ！なんですよ　そのお返事。  
わたくしに声をかけられるだけでも幸運なのですから　それ相應の  
態度というものがあるんじゃないかしら？」

「．．．．．」

あゝあ、一夏のやつ絶対にため息はいているな。  
まあ、あんなこと言われれば仕方ないっか．．．

「悪いな。俺　君が誰だか知らないし．．．」

やっぱり自己紹介の時に何も聞いていなかったか．．．  
千冬さんが担任の先生だったのが相当　衝撃だったんだな。  
実際俺も衝撃的だったし。

一夏は率直な気持ちを伝えるが、彼女はまるで信じられないものを見るかのような目であからさまにため息をはいた。

「はぁ．．．信じられせんわ．．．．．  
その貴方。貴方ならわたくしをご存知ですわよね？」

おいおい．．．なんで俺に聞くんた．．．．．  
こういう手合いはあまり関わりたくないんだがな．．．．．  
自己紹介の時に言ったといえさ、まずは自分から名乗るってのが礼儀じゃねえのか？  
礼を失する相手の名前を答えてやるほど俺は優しくないんだぜ。

「ああ知ってるぞ。  
確か セシ．．．セシリ．．．セ．．．．．クロワツさんだよな」

「なっ！？」

「黒輪さん？外国人なのに日本の苗字使ってるんだ？珍しいな．．．  
．．．」

「違う違う一夏。黒輪さんじゃなくてクロワツ“さん”だよ。  
ちゃんと『ッ』を付けるのを忘れるな。  
あと『さん』のアクセントにも気を付けろよ？」

「違いますわ！！あと一文字の所でどうして そんな変な名前が出てくるんですの！？」

貴方ワザと間違えましたわね！？  
わたくしの名前はセシリア・オルコット。  
イギリスの代表候補生ですわ！！」

机をバンツて叩きながら物凄い剣幕で怒鳴るクロワツ．．．もとい  
セシリア。

どうでもいいが、手 痛くないのかな？  
ん？一夏の頭にクエスチョンマークが浮かんでる。  
なんか分からない事でもあったのか？

「なあ、質問いいか？」

「ふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしく  
てよ」

へえ．．．本当に貴族だったんだ．．．流石イギリス。  
オルコットか．．．．．あとでGoogle先生に頼んで検索  
でもしてみつか．．．．．  
でもな貴族さんよ．．．一夏は俺達の遙か斜め上をいく男なんだぜ。  
そんな安請け合いしちまうと．．．．．

「代表候補生って、何？」

ガタタツ！！

あ、聞き耳を立てていたクラスの女子が数名ずつこけた。  
セシリアにいたっては人間を見る目じゃねえぞ．．．．．  
仕方ない．．．ここは助け舟を出すか．．．．．

「一夏。代表候補生つてのは、国家代表IS操縦者の候補生つてことだ。

参考書にかいてあ．．．．．そういえば捨てたんだったよな．．  
．．．．．  
まあその．．．いわゆるエリートってやつだな」

「おお、そうだったのか！」

「そう！エリートなのですわ！！」

お、復活した。

できれば してほしくなかったけど．．．

「本来なら、わたくしのような選ばれた人間とはクラスを同じくすることだけでも奇跡．．．幸運なのよ？  
その現実をもう少し理解していただける？」

—— おい待て．．．．．  
コイツは今なんつった．．．．．？

—— 選ばれた人間？幸運だと？  
なんだよその選民思想．．．

勝手に自分の価値観を他人に強要してんじゃねえよ．．．  
人の幸福は人の数によって違うんだよ．．．  
それを強要するなんて、侵略行為となんら変わらねえじゃねえか．  
．．．

「お、おい．．．それ以上言うと黒羽が――」

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。

男でISを操縦できると聞いていましたから、少しは知的さを感じさせるかと思っていま――」

「話しの途中で悪いが、ちょっといいかな？」

いけない　いけない．．．  
つい頭に血がのぼった．．．  
ここで怒っちまったら色々と面倒だ．．．  
少し冷静になれ．．．

「一夏をあまり責めないでくれるか？」

確かに俺達はISの知識は皆んなより低い。

それは、君たち女の子が以前からISの知識を学び、俺達にはその機会が無かった所によるものが強い。

言い訳のように感じるかもしれないがな．．．

だが、知らなければ学ぶというのが人間の美德だ。

今はまだ俺達二人とも未熟者だが、これから皆んなと一緒に学んで、皆んなに追い付きたいと思っている。

判定を下すにしては、今は時期尚早だと思わないか？」

「黒羽．．．．．」

「ただし、参考書を捨てた件は大きな減点だがな。

寧ろ もっと怒られてもいい」

「グッ．．．．．相変わらず辛辣なお言葉で．．．．．」

当たり前だ。

俺はどちらの味方でもないから お互いの非を注意するぞ。  
その方が余計なわだかまりを抱えなくて済むからな。

「．．．ふん．．．．．確か真鴉さんでしたっけ？

殿方にしては随分と立派な方ですね。少なくとも隣にいる方よりも．．．ですけど。

いいですね。確かに判断を下すのは些か時期尚早というものですわね。

今回は貴方のご高説に免じて退いてあげますわ」

まるで値踏みするような視線を俺に向けたあと、彼女は自分の席に戻っていった。

ふう．．．ようやく戻ったか．．．．．  
だがその前に．．．．．

「一つ、忠告しておこう．．．

あまり人を見下すような言動はしない方がいい。

それと、自分の価値観を他人に押し付けるな。

人の幸せは人それぞれだからな。

でないと、怒らせなくていい奴を怒らせる事になるぞ」

「．．．そう．．．．．」

心の片隅にでも置いておきますわ．．．．．」

セシリアはまるで興味が無いとばかりにそう言って、振り向きもせず自分の席に座った。

「はああゝ．．．．．」

焦ったああゝゝ．．．．．

オルコットさんがあ言った時スゴイ焦ったぞ。

黒羽を怒らせた！ってね。

それにしても、よく怒らなかつたな？」

「俺は人斬り包丁か何かか？

そんなにホイホイと怒ったりしねーよ。

入学初日でキレルとかしたくねーしな。

みんなとは仲良くしたいからよ。

それに、一応忠告はしておいた。

向こうはそれを聞いたか分からねーけどな」

「そうか．．．ひとまずは安心だ。

黒羽が怒ったら空気が重くなるからな。

アレはできれば受けたくない．．．．．」

「ははは、大丈夫だ。安心しとけ。」

ただし、次はねえけどな……」

俺の最後の言葉はチャームにかき消されて一夏に届く事は無かった。  
そして、ソレが現実になる事は誰も知らなかった。 . . .

~~~~~

「——それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について

て説明する」

ところ変わって三時限目。

一、二時限目とは違って千冬さんが教壇に立っている。

よっぽど大事な事なのか、山田先生までノートを持っていた。

やっぱアレか。世界最強に登りつめた人の知識は伊達じゃないんだな。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな・・・」

ふと、思い出したように千冬さんが言う。

クラス代表者つてのは・・・まあクラス長なもんだ。

ほら、小学校とかでもあつたら？委員長とか色んな名前で。

ちなみに隣にいる一夏は ちんぷんかんぷんな表情をしていた。

「クラス代表者とはそのままだの意味だ。

対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあクラス長だな。

一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

一夏の様子を察したのか千冬さんが補足を加える。

そしてざわめき立つクラスの皆んな。

なんかイヤな予感が・・・

「——ハイハイ！織斑くんを推薦します！」

「私は真鴉くんを推薦します！」

やっぱりそうなるか・・・
メンドクせーな・・・なんとかして一夏に押し付けられねーかな・・・
・・・

「では候補者は織斑 一夏と、真鴉 黒羽・・・他にはいないか？
自薦他薦は問わないぞ」

「え！？お、俺！？」

「織斑、席に着け邪魔だ」

ようやく事態が飲み込めたのか、立ち上がる一夏。
それと同時に振り下ろされる出席簿。
見事なテンポの良さ。これだけ見るとコントみたいだな。

「自薦他薦は問わないと言った。
他薦された者に拒否権はど無い。
選ばれた以上は覚悟をしろ。
お前も少しは落ち着いている黒羽を見習え」

いや、落ち着いているじゃなくて どうやって一夏に転嫁しようか
絶賛思考中なんです。

「待ってください！

こんな事 納得できませんわ！！」

思案に耽っている最中、突然甲高い声が思考の糸を断ち切った。
パンツと机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった。
さてと．．．俺の堪忍袋の緒は保ってくれるかな．．．．？

「そのような選出は認められません！

大体 男がクラス代表者なんて、いい恥晒しですわ！
わたくしに．．．このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一
年間味わえとおっしゃるのですか！？」

ふう．．．どうやら人を見下すな。って言葉は聞いていなかったら
しい．．．

一夏。そんなにブルブルと怯えるな。

俺の堪忍袋くんの緒はまだ半分も残ってるんだから。

「実力から行けば わたくしがクラス代表になるのは必然。
それも物珍しいという理由で極東の猿にされては困ります！！」

ははは．．．．．次は国の侮辱ときたか．．．．．

あれ？どうしたんだ一夏？

顔面蒼白じゃないか．．．体調が悪いなら保健室に行つてこい．．．

．．．

「いいですか！？」

クラス代表は実力トップがなるべき！

そしてそれは わたくしですわ！！

大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとっては堪え難い苦痛で——」

—— プツン．．．．．

あゝあ．．．切れちゃった．．．．．

「——おい．．．好い加減にしとけよ小娘．．．」

一夏 side

「——おい．．．好い加減にしとけよ小娘．．．」

やっちまった．．．

やってしまった．．．．．

オルコットさんが黒羽を怒らせちゃった．．．．．

教室の空気が一瞬で深海の底のように重くなる．．．．．
こうなった黒羽は千冬姉でも収拾がつかないぞ．．．．．！！

「黙って聞いていれば 他を見下すような事を言いやがって．．．
．．．
お前は一体何様のつもりだ？」

「何様って．．．わ、わたくしはイギリスの代表候補生ですわ！」

黒羽の威圧感をなんとか耐えたオルコットさんは、体にある胆力を
振り絞って黒羽に言い返す。

でもなオルコットさん．．．今の黒羽に何を言っても無駄だ．．．

．．．
黒羽が怒るという事は絶対相手に非がある時だけなんだから．．．

「そうだろうな。お前は代表候補生だ。
じゃあお前に訊くが、代表候補生ってのは他人を自由に嘲る権利を
持っているのか？」

「そ、それは．．．．．」

黒羽の言葉にオルコットさんが口を噤んだ。
オルコットさん．．．ここで言い返せなかった時点で あんたの負
けだ．．．．．

「勿論無いよな。」

他人を自由に嘲る権利など何処にも存在しない。

お前のやった行動は犬畜生に劣る行為だ！！

恥を知れ小娘！！！」

「——ッ！？」

黒羽の一喝が教室を揺らしたような錯覚を覚える。

オルコットさんは呼吸を荒くして立っているのもやっとだ・・・

「いいか、セシリア・オルコット。」

今のお前にはそれなりの権力もあるし発言力もある。

だがな、腕力だろうと権力だろうと、目に見える見えないの差こそあれ、これらは立派な“力”だ。

“力”にはそれ相応の“覚悟”や“責任”を持たなければいけない。だがお前にはソレが無い。

“覚悟”も無く、“責任”すら持たずに振り回す“力”はただの“暴力”と一緒にだ」

「.....」

オルコットさんは黒羽に言い返さない、言い返せない。

それは黒羽の言葉に途轍もない重みがあるからだ。

まるで先達の人が語るような・・・

黒羽の言葉にはそんな重みが込められていた。

「そして、お前は自分を裏切った」

「え．．．．．？」

突如 黒羽の威圧感が霧散して、まるで悪い事をした子供を窘めるような口調で語りかけた。

ふう．．．どうやら黒羽の怒りは“良い”方の怒りだったみたいだ。

「お前はこんな事をするために代表候補生になった訳じゃないんだろ？」

お前の眼を見れば分かる。その眼は真っ直ぐな者にしか宿らない瞳だ。

自身の才能。それに驕る事なく、慢心もせず、ただひたすらに努力を積み重ねてきて勝ち取ったんだろ？

おそらくは大切なモノを守るためにな」

「っ．．．．．！？」

オルコットさんの表情は今までは明らかに違う表情だった。どうやら黒羽の言葉がオルコットさんの核心を突いてみたいだ。黒羽は相手の本質を見極めるのが得意だからな。

「そんなに頑張ってきたアンタがあんな事を言ってしまった．．．だが、アンタはまだ若いから これから学んでいけばいい。」

“力”を行使する“覚悟”を。“力”を持つ者の“責任”を．．．さつきも言ったが、学ぶのが人間の美德だからな。でも、これから先も学ばなければ、アンタはアンタ自身を裏切った事になる。

アンタはそれでいいのか？セシリア・オルコット」

「．．．．．わたくしは．．．．．」

オルコットさんから感じる刺々しい雰囲気は今も感じられない。

これなんだよ．．．．．

黒羽が怒る時は、まず相手の悪い所を徹底的に問い詰めて、相手にまず自覚をさせ、その後に関手の良い所を言うんだ。

普通の人は頭ごなしに怒るが、黒羽は怒ったあとのケアも忘れない。俺も黒羽に怒られた時があつたけど．．．．．うん、最後の一言がなかったらきつと自殺していた．．．．．

．．．．．あ、1人だけいた。黒羽が一切ケアしなかった相手

が。

実は中学にもいたんだ。オルコットさんみたいな人は。

いや、オルコットさん以上に酷かった。あそこまでいくと　もう醜悪に近い。

男子を奴隷のように扱って、殴る蹴るは当たり前。

最終的には殺しても問題ない、なんて事を言い出した。

それを聞いた黒羽が怒っちまってさ．．．

相手の何から何まで全否定。それも殺気を開放してでだ。

女子は何度も気絶しかけたが、黒羽が無理矢理叩き起こしての繰り返し．．．

聞いてるこつちが鬱になりかけた．．．．．

最終的に女子は転校。噂じゃ精神に傷を負って病院に通っているなんて話もあった。

そして俺達のクラスはしばらく笑顔ができなくなった。

【笑顔が消えた三日間】って伝えられてて今でも怖れられている。たしか虐められてた男子までも黒羽を止めようとしていたな...

...

「——二人ともそこまでだ。

話して決着がつかないのなら決闘で決着をつける。

勝負は一週間後の放課後、第三アリーナにて黒羽VSオルコット。

その翌日は織斑VSオルコット。と総当たり戦で行う。
以上。

それでは授業を始める」

千冬姉はパンツと手を打って話を締める。

ふう、一時はどうなるかと思ったけど、何事もなく良かった...
早速授業に集ちゅ...う...?...

あれ?...なんで俺まで決闘する事になっているんだろう...
...

俺の疑問に答えてくれる人が誰もいなかった... ..

黒羽side

いやあ...ついキレちゃった... ..

入学初日で女子を怒るなんて最悪な滑り出しだな... ..

昼休みは食堂で皆んなとの溝を埋めるのに奔走したが・・・どうだろうな・・・

それと、皆んなから聞こえてくる『兄貴、お兄さん』って、一体なんだ？

「――あ、まだ教室に残っていたんですね。織斑くん。真鴉くん。」

すると、山田先生がやってきた。ちなみに今は放課後。俺達は決闘に向けて自習中だ。

「どうしたんですか？山田先生」

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号が記された鍵を渡してくる。
お？鍵が2つ・・・俺と一夏は別の部屋か・・・

「あれ？俺達の部屋は決まっていないんじゃないですか？
一週間は自宅から通学するって聞いたんですけど・・・」

「・・・さては政府の方針ですね？」

俺達は世界中が欲しがっている観察対象だからな・・・
モルモット

ホイホイと外を出歩くなんざ、フォアグラの鴨が葱を背負ってるよ
うなもんだ。

「そ、その通りです。よく分かりましたね。
つと、この事はくれぐれもご内密に．．．．」

山田先生は小声でヒソヒソと語りだす。
む．．．ち、近いな．．．．

「せ、先生．．．少し近いです．．．．」

「あつ、いいい、いやつ、そのつ．．．
べべ、別にワザとかではなくてですね．．．！」

いや、でももう少し近くにいたいなあ、なんて思わなくもないで
すけど．．．．」

山田先生は顔を赤く染めてクネクネと体をくねらせる。

．．．．この人 大丈夫なのか．．．．？

「部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できな
いので今日は帰ってもいいですか？」

そしてそれを華麗にスルーする一夏。

たまに思っんだが、俺はこいつが大物なんじゃないかって思っ時が

ある．．．．

「——それは大丈夫だ。

私が手配してやった。ありがたく思え」

そして現れる千冬さん。

ああ．．．なんとなくだけど分かった気がする．．．

「まあ、生活必需品だけだな。

着替えと携帯電話の充電器．．．黒羽は鍛錬用の大太刀があれば充分だろう」

やっぱりね．．．

俺にはマンガとかゲームとかの娯楽品がないから別にいいけど。
一夏はそうじゃないらしいな。

「ところでお前達の部屋は二つあるんだが．．．
相部屋と個室．．．どっちがいい？」

『じゃんけん——ポンッ!!』

千冬さんの言葉と同時に動き出す俺達の手。

古今東西、物事を決めるのに　これはど単純で迅速で強制力を持つ

ものはない。

だがなあ　一夏あ．．．．．

俺の動体視力をナメるなよ．．．．．

――動きが突如スローモーションになる。

俺達は未だに手を出す最中。

その時、一夏の手が僅かに動いた！

ゆつくりと．．．一夏の五本の指が開いていく．．．

――貰ったあああ！！！！

一夏：パー

俺：チヨキ

「くっそおおお！！

負けたああああ！！」

「はっはっは！！勝利は我にあり！！」

俺は高らかに勝利の凱歌を歌いながら個室^{安住}の鍵を受け取る。

一夏も泣きながら相部屋^{地獄}の鍵を受け取った。

ふっふっふ．．．しばらくは落ち着いて過ごせれる。

「黒羽．．．大人気ないぞ．．．．．」

やっぱり千冬さんには　こんな小細工見　破られてたか・・・
でも告発するつもりはないらしい。
少しだけ呆れ顔だけど・・・

「なに言っているんですか？

ジャンケンで全く同時に出すなんて不可能ですよ。
たまたま、俺の手が後になっただけです」

「ふっ・・・そういう事にしておいてやろう」

よし、唯一の懸念材料であつた千冬さんも納得した。
これで俺は正式に個室だ。早速向かうとするか。

「よし、一夏。早速行くぞ！」

俺は未だ頂垂れている一夏を引きずりながら部屋へと向かった。

~~~~~

「ほお・・・ここか・・・」

そして着いたユートピア。

俺の部屋番号は「1126」

一夏の部屋番号は「1125」

お隣さんだな。

「それじゃあ俺は先に休む。また明日な一夏」

「——おかしい．．．どうも腑に落ちない．．．  
アレにはきつと細工があつたはずだ．．．．．」

一夏は俺の声が耳に入っていないらしくブツブツ言っている。

惜しいなあ．．．確かにズルはしているが、見破らなければお前の負けだ。

俺はブツブツ言っている一夏を放っておいて部屋に入った。

「おお．．．中々．．．．．」

まず最初に飛び込んできたのは大きなベッド二つ。

どうやらこの部屋は二人用らしいが、人数が余って俺の個室になったみたいだ。

外装も設備も、そこらのビジネスホテルより遥かに良いものばかりだ。

俺はすかさずベッドに体を預けた。

「ふう．．．．．」

隻眼で天井を見上げ、これからの事を考える。

目下の所はセシリアとの決闘。

生身での戦闘だったら圧勝だが、今回使うのはIS。

向こうの方に一日の長がある。まずはその差を埋める。

埋まらないまでも出来るだけ近付く。

その為に必要なのは知識だ。

これは参考書や教科書を読み漁ればいい。

あとは経験だな。

こればかりはISに乗らなきゃどうしようもない。

明日にでも訓練機の貸し出しを申請してみよう。

俺の業を上手くISにフィードバックできれば勝てる確率はグンと上がる。

「——見るなああああああ！！！！」

「うおおおおおおお！？」

ん？突然　一夏の声が聞こえた。

もう一人の声は筈か．．．

って事は一夏の相部屋の相手は筈だったのか．．．

まあ、結果的にはオーライだな。

「成敗してくれる!!」

「なっ!?!? . . . なんで木刀でドアを貫通出来るんだよ!?!?」

ドア . . . 確か材質は木だったな . . .

そうか、箒もそれだけの技を身に付けたのか . . .

明日 久し振りに模擬戦でもしてみっかな . . . . .

それにしても相変わらず騒がしい二人だな . . .

小学校の頃から全然変わってねえ。

. . . . . よし、とりあえず俺は――

「――寝る!」

2人の夫婦漫才を聞くなんて御免だ。

俺はすぐさまベッドに包まった。

結構疲れが溜まっていたのか、俺はスンナリと目蓋を閉じて夢の世界へと旅立った . . . . .

後日 勉強ができなくて一夏に八つ当たりしたのもお忘れなく . . .

## 開幕の鐘（後書き）

ようやく一日が終了しました！

長かった・・・

私は他の作家さんよりグダグダ書いてるんでしょうか？

もう少し内容を薄くすれば早く書けるんですけど・・・

内容を少し編集

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7323x/>

---

最後の鴉は何を思って飛ぶ...

2011年11月14日21時57分発行